ISSN 0386-2801

エイコス

――十七世紀フランス演劇研究――

V

研究

17 世紀フランス演劇史研究ノート―1603 年アンジェ：ある劇団協約文書をめぐって―　戸口　民也（1）

シュレナ―ヒロイズムの終焉―　小林　　卓（13）

翻訳

トリスタン・レルミット『薄幸の小姓』（その３）　野池　恵子（26）

会員名簿

後記

1 9 8 9

17世紀フランス演劇史研究ノート

——1603年アンジェ：ある劇団協約文書をめぐって

戸口民也

昨年（1988年）の夏、学生の語学研修の引率でフランスを訪れる機会をえた。滞在中、アンジェとパリの古文書館で演劇史関係の文書資料をいくつか閲覧し、コピーやマイクロフィルムをとることができたが、その中には従来の研究を修正する手掛りとなるものが含まれている。今回はそのうちのひとつについて述べてみたい。

今回取り上げるのは、アンジェ市にあるメーヌ・エ・ロワール県立古文書館 Archives départementales de Maine-et-Loire (106, rue de Frémur, ANGERS) に収められている次の文書である。

文書の日付……1603年8月19日
内　　容……「国王の俳優」comédiens du Roi を名乗る役者たちによる劇団協約
文書の型……A3サイズの紙1枚　二つ折り4ページ
整理番号……5E5，93

なお、この文書の閲覧、コピー、解読上の誤りの訂正（後述するように、この文書はすでに1933年にエミール・パスキエによって発見され、転写、公表されていた）に関しては、すべて同古文書館のサラザン Sarazin 氏のお世話になった。ここにその旨を記してお礼申し上げます。

この文書に最初に注目したのはエミール・パスキエ[1]である。彼は1933年に、公証人が作成した文書の収集、整理、保存の必要性を訴えた論文を発表し、あわせてこの文書を含む2～3の文書・資料を例として補遺にあげた。

パスキエ自身は演劇史の専門家ではなく、この文書も参考例として取り上げたにすぎないようだ。その際、パスキエは文書の解読をジャック・ルヴロンに依頼している[2]。ルヴロンは当時はメーヌ・エ・ロワール県の古文書保管主任だったようだが[3]、のちにこの文書をふまえて《国王の俳優の起源》と題する論文を『メルキュール・ド・フランス』（1949年1月1日号）に発表する[4]。

しかし、あとで詳しく述べるように、ルヴロンの文書解読にはいくつか大きな誤りがあり、『メルキュール・ド・フランス』に掲載された上記論文についての書評のなかでレーモン・ルベーグはいくつかの疑問と、読み方の訂正を示唆する[5]。

ルベーグはルヴロンから原資料を借りて読んでいる[6]。しかしルベーグ自身が認めているように、この文書は「読み取りにくく」[7]、一部に解読しきれない個所が残った。とはいえ、さすがに演劇史の専門家だけあって、俳優の名前に関する個所（ルヴロンの読み誤りもここに集中していた）については、的確な訂正が施されている。以下、両者を比較検討してみることにしよう。

パスキエの論文の補遺（＝ルヴロンの解読）では、協約書に記されている俳優の名前は次のようになっている。（図版Ⅰにあげた文書の第１ページを参照。なお下線部は解読上問題ありと考えられる部分である。詳しくは後で述べる。）

...Jacques Robineau comédien, de la Bretonnière, Fleury, Jacault comédiens, Montfleury et Collombe Vesnière sa femme, Danyel du Gué comédiens, la Chesnau et Léonard Dallembourg, Claude Piton sa femme, tous comédiens ordinaires du Roy... [8]

この読み方でゆくと、俳優たちは総勢10人となる。わかりやすくリストにすれば次のようになるのだろう。

1 Jacques Robineau	6 Collombe Vesnière
2 de la Bretonnière	7 Danyel du Gué
3 Fleury	8 La Chesnau
4 Jacault	9 Léonard Dallembourg
5 Montfleury	10 Claude Piton

実際にルヴロンは『メルキュール・ド・フランス』に掲載した論文の中で「10人ほどの俳優」une dizaine de comédiens とか、「全部で男性７名、女性３名」en tout sept hommes et trois femmes などと述べている[9]。しかし、その10人が具体的に誰と誰なのかとなると、ルヴロンは必ずしも明瞭に示しておらず、次のような曖昧な表現ですませている。

Il y avait là Robineau, La Bretonnière, du Gué, d'Alembourg, Jacault, Colombe Vénière et Claude Piton, en tout sept hommes et trois femmes dirigés visiblement par un certain Montfleury que tous reconnaissaient comme le maître de la troupe [10].

これでは単純に足算をしても人数があわない。例えば、ルヴロンの読み方からするなら Fleury, du Gué, La Chesnau の三つの名前は当然それぞれ一人分として数えあげることになるはずなのだが、何故か言い落としている。また「３人の女性」ということだが、Collombe Vesnière と Claude Piton の二人が女性であるのは勿論だとしても、残るもう一人が誰なのか、ルヴロンは特定していない。上のリストの７番目の La Chesnau を女性と考えたのだろうか？

これに対してレーモン・ルベーグは、俳優たちの数は６人であり、それぞれの名前は次のように読みかえるべきであろうと指摘する。

Nos six comédiens étaient quatre hommes et deux femmes mariées. Voici leurs noms, dans l'ordre où ils sont mentionnés sur l'acte: Jacques Robineau, sieur de la

Bretonnière, Fleury Jacquault, sieur de Montfleury, sa femme Colombe Veniere, Daniel du Gué, sieur de la Chesnaie, Bernard Dalanbour, et Claude Piton, femme de Du Gué (ou de Dalanbour) [11] .

ルベーグの読み方は、いくつかの点を除いて基本的には正しい。ルベーグの読み方をリストの形で表わすと、次のとおりである（下線部はコメントもしくは訂正の必要ありと考えられるところ）。

1. Jacques Robineau, sieur de la Bretonnière
2. Fleury Jacquault, sieur de Montfleury
3. Colombe Veniere [a], femme de Fleury Jacquault
4. Daniel du Gué [b], sieur de la Chesnaie
5. Bernard [c] Dalanbour
6. Claude Piton, femme de Du Gué (ou de Dalanbour [d])

さて、ルベーグの読み方について、私が留保をつけた点をひとつずつあげると以下のとおりである。

（a） Colombe *Veniere* の姓は、本人の署名からすると *Veniere* のままでよい。ただ、本文の綴りなどから考えられる読み方にしたがって現代ふうに綴れば、むしろ *Vénière* とすべきだろう。（なお、図版Ⅱにあげた署名を見ると、二番目の e の字が é と書かれているようにみえるが、当時のこうした文書に現代のアクサン・テギュそのままの綴り字を使うことはまず考えられない。なにかの偶然で e の字の上にアクサン・テギュによく似た斜線のような跡がついたのだろう。）

（b） Daniel *du Gué* については、本人の署名（図版Ⅱを参照）を見たところでは、むしろ *Dugue* と読むほうがよさそうである。ただ、署名では同じDの字を名前と姓とで異なった字体を用いていたり(*D*aniel *d*ugué)、*d*ugu の綴り字ひとつひとつの間隔が少しずつ開いていたりするので、du Gué と読む可能性も否定はできない。

（c） *Bernard* Dalanbour は、協約書の本文に従えば *Léonard* と読むべきである。ただ念のために言えば、こうした書類の本文は公証人ないしは書記が書いたもので、当人の署名とは綴りが異なる場合がよくあるので、人名の正確な綴りを知るうえでは必ずしも決め手とはならない。よい例がこの Dalanbour で、本文には *Dallembourg* と記されているが、本人は *Dalanbour* と署名しているのである。このように、本人の署名がある場合には、それを尊重すべきことは明らかだろう。ただ、彼の姓はこうして確認できたわけだが、名前の方はあいにく署名には記されていないため、この文書だけからは Léonard に間違いないとはまだ断定できない。とはいえ、綴りの若干の違いならともかく、名前そのものを公証人が聞き違えて書いたとは想像しにくい。Léonard と Bernard とでは発音もかなり異なるからである。

だが、Dalanbour の名を *Léonard* と断定してもさしつかえないことを示す文書が実は別にあったのである。パリの国立古文書館に収められている 1615 年 10 月 22 日付の劇団協約書（未

刊資料）がそれで、アラン・ハウによれば、この文書に名前があげられている俳優たちのなかに *Léonard* Cutin, dit d'*Alambourg* と彼の妻 Marguerite Dugoy の名前が記されているとのことである[12]。この *d'Alambourg* がわれわれの問題にしている Dalanbour と同一人物であることはまず間違いはない。綴りの多少の違いが問題にならないことはすでに述べたとおりである。また、ハウが推測しているように、彼の妻の Marguerite Dugoy は Daniel du Gué（＝Dugué）の血縁ではないかと思われる[13]。なお oy（＝oi）という綴りの発音は、当時は〔e〕〔we〕〔wa〕のあいだで揺れ動いていたことを付け加えておこう。

それでは何故ルベーグは Dalanbour の名前をあえて *Bernard* としたのだろうか？　それは彼がフランセンの研究《オテル・ド・ブルゴーニュ座に関する未刊資料》[14] をふまえたためと思われる。フランセンは次のように述べている。

> ...en 1615, le nommé *Bernard Dalembourg*, comédien, vint occuper avec《 ses compaignons commédiens français 》la salle de l'Hôtel qu'il louait du 16 septembre《 jusques au jour Saint-Michel ensuivant vingt-neufiesme du présent mois 》, moyennant la somme de 100 livres tournois, payable en deux termes[15].

この *Bernard Dalembourg* とわれわれが問題にしている Léonard Dalanbour とがどういう関係にあるのかは不明だが、ルベーグはこの両者を同一人物と考え、名前についても *Bernard* を採用したのだろう。勿論その時点では、ルベーグはハウが紹介している文書の存在を知らなかった。だがそれにしても、いかにも関係のありそうなこの二つの名前が、しかも時期を接して（1615年の9月と10月）パリの公証人の文書にあらわれるという事実には、非常に興味深いものがある。研究が進めば両者の関係も明らかになるかもしれないが、いまは取り合えず、この二人はどうも別人と見たほうがよいとだけ言っておこう。

なお参考までにふれておくと、パスキエは次のように指摘している。

> Aux fêtes de l'entrée de la reine-mère à Angers, en 1620, figurent des《 joueurs de viollon 》, parmi lesquels ce Léonard d'Allembour (Arch. munic. d'Angers, CC14)[16].

だが、この Léonard d'Allembour と今問題にしている Léonard Dalanbour とが間違いなく同一人物であるかどうかは、まだ確認できずにいる。

（d）Claude Piton は Dugué (du Gué) の妻とみるべきである。協約書の本文を見ると Danyel du Gué sieur de la Chesnaie で終わる行と、et Léonard Dallembourg で始まっている行の間に、書込の形で Claude Piton sa femme と記されている。とすればこれは

> ...Danyel du Gué（＝Daniel Dugué）sieur de la Chesnaie et Claude Piton sa femme, et Leonard Dallembourg（＝Dalanbour）

と読むべきだろう。それに Léonard Dalanbour には Marguerite Dugoy (Dugué?)という妻がいることは先にふれたアラン・ハウの研究によっても明らかにされているのである。

さて、ここでもう一度、前にあげたパスキエの論文の補遺（ルヴロンの解読）に基づいた読み方の部分を見直していただきたいが、ルヴロンの解読の明らかな誤りと指摘できるのは以下の点である。

1. Jacques Robineau と de la Bretonnière とは別人ではなく、同一人物の別名を後にあげたものである。
2. Fleury と Jacault は、別人として切り離すのではなく、Fleury Jacault という一人の人物と読まねばならない。しかもこの Fleury Jacault と Montfleury とは同一人物である。
3. Danyel du Gué(＝Daniel Dugué) と La Chesnau （La Chesnaie と読むほうが正しい）も同一人物である。

何故ルヴロンはこうした誤りを犯したのか？　私が原資料を閲覧した際に貴重な助言をいただいたメーヌ・エ・ロワール県立古文書館のサラザン氏によれば、sieur という語を意味する略字をまったく知らなかったためである、とのことだ。そう思って問題の個所を読むと、たしかに納得がゆく。ただルヴロンの名誉のために一言付け加えておくと、彼の解読はこの sieur という語の読み方以外ではほとんど問題がない。1933 年当時は彼はまだ 26 ～ 7 歳の若さで [17] 、たぶん経験が浅かったのと、17 世紀演劇に関しては特に専門家ではなかったために、こうした読み違いをしてしまったのだろう。

以上問題点を指摘してきたが、俳優名が列挙された個所を改めて読み直すと以下のようになる。（綴りは協約書本文のままとする。）

...Jacques Robineau sieur de la Bretonnière, Fleury Jacault sieur de Montfleury et Collombe Vesnière sa femme, Danyel du Gué sieur de la Chesnaie et Claude Piton sa femme, et Léonard Dallembourg, tous comédiens ordinaires du Roy...

そしてこれを、本人の署名から確認できる綴りはそれを採用した上でリストにすると、次のようになる。（イタリック体は本人の署名による綴りを表わす。）

1. Jacques *Robineau,* sieur de la Bretonniere
2. Fleury *Jacqualt,* sieur de Montfleury
3. Colombe *Veniere* [⇒ Vénière], femme de Fleury Jacquault
4. *Daniel Dugué* [ou *du Gué*], sieur de la Chesnaie
5. Claude Piton [18] , femme de *Dugué*
6. Léonard *Dalanbour*

なお、この劇団の座長はこれまでずっと Fleury Jacqault であるとされてきたが、この類の文書では俳優たちの名前を列挙する場合、まず座長の名前から始めるのが通例である。常識的に考えてもこれは当然のことといえよう。とすれば、この一座の座長はむしろ Jacques Robineau とみるべきであろう。（Jacques Robineau の名前は他の個所でも最初にあげられている。）

さて、こうして6人の俳優について原資料をもとに確認作業を終えたわけだが、この結果をふまえ、モングレディアンとロベールの『17世紀フランス俳優事典』[19]の関係個所を次のように訂正したい。（なお、イタリックの部分が訂正もしくは新たに加わる事柄である。）

p.16 ALEMBOURG (d'), v. *DALEMBOURG* ⇒ ALEMBOURG (d'), v. *DALANBOUR (Léonard) et DALEMBOURG (Bernard).*

新項目 *DALANBOUR (Léonard CUTIN, dit). Il appartient à la troupe de Jacques Robineau, dit La Bretonnière (acte d'association du 19 août 1603, Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ; Rev. Hist. Th., 1948–1949, 292), puis à la troupe de Valleran le Conte, avec sa femme Marguerite Dugoy (acte d'association du 22 octobre 1615, Rev. Hist. Th., 1981, I, 18–19 et 24).*

新項目 *DALANBOUR (Marguerite DUGOY, femme de Léonard CUTIN, dit). Troupe de Valleran le Conte, avec son mari (acte d'association du 22 octobre 1615, Rev. Hist. Th., 1981, I, 18–19 et 24). Elle est peut-être une parente de Daniel Dugué, dit La Chesnaie.*

p. 65 DALEMBOURG *(Bernard ou Léonard)* ⇒ DALEMBOURG *(Bernard)*. Chef de troupe, il signe le 15 septembre 1615 un bail à l'Hôtel de Bourgogne, valable jusqu'au 29 septembre (103, 340 ; 233).

〔従来の文言の一部は新項目 *DALANBOUR (Léonard CUTIN, dit)* に移し，残りの部分も若干修正。〕

p. 65 *DALEMBOURG (Claude PITON, femme de Bernard ou Léonard)* = 削除

新項目 *DUGOY (marguerite), v. DALANBOUR (Mlle).*

p. 84 DUGUÉ (Daniel), v. *LA CHESNAYE* ⇒ *DUGUÉ [ou DU GUÉ]* (Daniel), v. *LA CHESNAIE.*

p. 114 *JACOB (Fleury)* ⇒ *JACQUAULT (Fleury), v. MONTFLEURY.* あるいは *JACOB (Fleury), v. JACQUAULT* とした上で，新項目 *JACQUAULT (Fleury), v. MONTFLEURY* を設ける。

新項目 *LA BRETONNIÈRE (Jacques ROBINEAU, dit). Chef de troupe à Angers (acte d'association du 19 août 1603, Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ; Rev. Hist. Th., 1948–1949, 292).*

p. 117 *LA CHESNAYE* (Daniel DUGUÉ, dit) ⇒ *LA CHESNAIE* (Daniel DUGU *[ou DU GUÉ]*, dit). Troupe de *Jacques Robineau, dit La Bretonnière (acte d'association du 19 août 1603, Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ; Rev. Hist. Th., 1948–1949, 292)* ; troupe des 《Loyaux Bravelettes》, Hôtel de Bourgogne, juillet 1609 (233).

新項目 *LA CHESNAIE (Claude PITON, femme de Daniel DUGUÉ [ou DU GUÉ], dit). Elle est avec son mari dans la troupe de Jacques Robineau, dit La Bretonnière (acte d'association du 19 août 1603, Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ; Rev. Hist. Th., 1948 –*

1949, 292).

p. 119 LA FONTAINE (Colombe *VENIER*) ⇒ LA FONTAINE (Colombe *VÉNIÈRE,* femme de : 1° Fleury *JACQUAULT* ; 2° Etienne RUFFIN, dit). Sœur de Marie *Vénière,* Colombe *Vénière* est, avec son premier mari Fleury *Jacquault,* à Angers en 1603, à trois quarts de part, *dans la troupe de Jacques Robineau, dit La Bretonnière (acte d'association du 19 août 1603 , Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ; Rev. Hist. Th., 1948–1949, 292)* ; remariée à Etienne Ruffin... 〔以下従来の文言と同じ〕

新項目 *MONTFLEURY (Fleury JACQUAULT, dit). Il est dans la troupe de Jacques Robineau, dit La Bretonnière (acte d'association du 19 aout 1603, Angers, Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93;180;Rev. Hist. Th., 1948–1949, 292),* épouse Colombe *Vénière,* qui devait se remarier avec Etienne Ruffin, dit La Fontaine (Rev. Hist. Th., 1948–1949, IV, 292–294). Il est avec elle en 1611 à Toulouse dans la troupe de François Vautrel, mais 《 ... ledit Jacob *(sic)* s'en est distrait pour être homme libertin... et n'ayânt moyen de nourrir et entretenir sa dite femme, l'aurait délaissée en ladite compagnie où elle aurait vécu et gagné sa vie du mieux qu'il lui aurait été possible 》. Fleury *Jacquault* fait un procès à Vautrel et à ses compagnons, saisit leurs meubles, réclame sa femme. Il obtient contre eux deux arrêts du Parlement de Toulouse, le 28 novembre 1611 et le 12 août 1612. Ils seront réhabilités par lettres du 14 septembre 1613 *(32, 279 ; 71). Fleury Jacquault serait probablement le père de Zacharie Jacob.* 〔文言の大部分は従来の JACOB (Fleury) の項目にあったものを用いたが，最初と最後の物分に修正を施した。なお最後の部分の修正に関しては後述。〕

p. 171 PITON (Claude), *v. DALEMBOURG (Mlle)* ⇒ PITON (Claude), *v. LA CHESNAIE (Mlle).*

p. 203 *VENIER* (Colombe), v. LA FONTAINE (Mlle) ⇒ *VÉNIÈRE* (Colombe), v. LA FONTAINE (Mlle).

なお、これらの修正に関連して、人名、夫婦・血縁関係、日付等を訂正すべき項目がほかにもでてくるが、あまりに煩雑になるためここでは省略する。

ここで Fleury Jacquault と Zacharie Jacob (17 世紀半ばにオテル・ド・ブルゴーニュ座で活躍した有名な Montfleury) との関係について若干補足しておきたい。エミール・カンパルドン[20] 以来、Fleury Jacquault (これまで一般に Jacob とされていたが、本人の署名に従い Jacquault とすべきである) は Zacharie Jacob の父親とみなされてきた。ただ、二人の血縁関係をはっきり証明する証拠は今まで発見されていない。同じ舞台名、アンジュー地方との関わりなど、いくつかの状況証拠をもとに親子であろうと推測されているわけだが、確証がない以上、断定的な言い方は避けるべきだろう。

ところで二人の姓が――発音はきわめて近いのだが――綴りを異にしている点はどう考えたらよいのか？　メーヌ・エ・ロワール県立古文書館のサラザン氏によれば、アンジュー地方に Jacob という姓の名家があったという。だからもしも Fleury が実際に Jacob という姓だったならはっきりそう名乗っていたはずだ、とのことである。

だがカンハルドンが発見した文書（1613 年 9 月 14 日付）には Fleury Jacob と記されている[21]。ただこの文書にはあいにく本人の署名はない。書記が聞き違えたのだろうか？　あるいはアンジューから離れた土地では、勝手に名家の姓を借用して「家柄」を誇ったのだろうか？　それとも本当に Jacob 家の一族なのだが、役者稼業に身を落とした身を恥じて地元では名をはばかり、よその土地でだけ本名を使ったのだろうか？　どれが真実か明らかではないが、おそらく「家柄借用」だったのではなかろうか。

Zacharie の場合にもたぶん同じようなことが言えるだろう。「伝説」によれば、彼はアンジュー地方の名家の生まれで、立派な教育を受け、ギーズ公の小姓にもなったが、芝居に夢中になり、ついには出奔して旅役者の一座に身を投じたということだ[22]。彼自身は Zacharie Jacob と署名している[23]。「家柄」を飾るためか、あるいは事実なのか、それとも――もっと空想をたくましくすると――父親か誰かにそう言われたために自分でも信じ込んでいたのだろうか？　いずれにせよ、彼の生い立ちには不明な点が多く、はっきりしたことは言えない。

ところで、これまではふれなかったが、アンジェの文書には既にあげた６人の俳優の他に、準座員もしくは見習役者４人の名前も記されている。本文中に記された順に名をあげると Toussainctz Dallibert, Julien Bedeau, Callais Anquetif, François Bedeau の４人である。うち Dallibert と Anquetif については特筆すべきことはないが、Julien Bedeau と François Bedeau の兄弟は、後にそれぞれ Jodelet, L'Espy の芸名で活躍することになる[24]。しかし彼らについて語る余裕は残念ながらもうない。別の機会を待つことにする。

文書を読むと当時の旅役者一座の様子が伝わってくる。が、それについてもまた別の機会に述べることにする。文書を転写して補遺にあげておいたので、関心のある方はお読みいただきたい。

埃だらけの古文書をひっぱりだして、まさに重箱の隅をつつくようなことを細々と述べてきたわけだが、フランス 17 世紀演劇史研究に携わるうちに目にとまり、気になって調べたことを覚書ふうにまとめてみたらこんな具合になった。既に公表され、訂正もかなりの程度まで施されていた文書ではあるが、あらためて訂正・確認すべき点がいくつか明らかになったので、こうして発表した次第である。なにかの参考にしていただければ幸いである。

原註

(1) Emile Pasquier, 《Les Archives notariales d'Angers》, in *Mémoires de la Société d'agriculture, sciences et arts d'Angers,* 6e série, t. VIII (1933), pp. 5–22. Appendice III. Acte d'association des comédiens du roi, le 19 août 1603 à Angers (pp. 20–22).

(2) Ibid., p. 20, n. 1.

(3) Cf. *Who's who in France 1985–1986,* Paris, Lafitte, 1985.

(4) Jacques Levron, 《Les origines des Comédiens du Roi》, in *Mercure de France,* n° du 1er janvier 1949. pp. 91–96.

(5) Raymond Lebègue, *Compte rendu de l'article de Levron,* in *Revue d'histoire du théâtre,* 1948–1949, IV, pp. 292–294.

(6) *Ibid.*, p. 292, n. 1.

(7) *Ibid.*

(8) *Les Archives notariales d'Angers,* p. 20.

(9) *Les origines des Comédiens du Roi,* p. 92.

(10) *Ibid.*

(11) *Compte rendu* déjà cité, p. 292.

(12) Alan Howe, 《Couple de comédiens au début du XVIIe siècle : Le cas de Nicolas Gasteau et Rachel Trépeau》, in *Revue d'histoire du théâtre,* 1981, I, pp. 17–25. Voir notamment pp. 18–19 et aussi n. 22 de la page 24.

(13) *Ibid.*, n. 22 de la page 24.

(14) J. Fransen, 《Documents inedits sur l'Hôtel de Bourgogne》, in *Revue d'histoire littéraire de la France,* juillet–sept. 1927, pp. 321–355.

(15) *Ibid.*, p. 340.

(16) *Les archives notariales d'Angers,* p. 20.

(17) *Who's who in France 1985–1986*によれば1906年9月生まれとある。

(18) Claude Piton は「サインができないとの申し立てあり」と協約書の本文末尾に記されており，実際に彼女の署名はない。

(19) Georges Mongrédien et Jean Robert, *Les comédiens français du XVIIe siècle. Dictionnaire biographique,* 3e édition revue et augmentée, Paris, Editions du CNRS, 1981.

(20) Emile Campardon, *Les comédiens du Roi de la troupe française,* Paris, 1879. Cf. Appendice N° IV, Comédiens du Roi réhabilités (pp. 279–280).

(21) *Ibid.*

(22) 例えば Lemazurier, *Galerie historique des acteurs du théâtre français,* Paris, 1810, tome I,

pp. 424 et sqq. を参照のこと。

(23) Cf. S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne,* tome II, Paris, Nizet, 1970, Appendice N^{OS} 11 et 15.

(24) なお，モングレディアンとロベールの『事典』（註19参照）におけるこの４人に関する項目についても，１６０３年アンジェにかかわる記述は次のように改めるべきだろう。
Troupe de *Fleury Jacob*, Angers, 1603 (Rev. Hist. Th., 1948-1949, p. 292). = Troupe de *Jacques Robineau, dit La Bretonnière,* Angers, 1603 *(Arch. dép. Maine-et-Loire, 5E5, 93 ; 180 ;* Rev. Hist. Th., 1948-1949, p. 292).

補遺 Acte d'association des comédiens du roi, le 19 août 1603, à Angers

Mardy apres midy dix neufiesme jour d'aoust mil six cens trois.
Devant nous Guillaume Guillot notaire royal Angers et tesmoings cy après nommez furent présenz et personnellement establys chacuns de Jacques Robineau sieur de la Bretonnière, Fleury Jacault sieur de Montfleury et Collombe Vesnière sa femme, Danyel du Gué sieur de la Chesnaie et Claude Piton sa femme, et Léonard Dallembourg, tous comédiens ordinaires du Roy estans de présent en ceste ville, lesdites femmes de leursdits marys suffisammant auctorizées, quant a ce lesquelz deüment subzmis et obligez respectivement etc confessent avoir ce jour d'huy faict et font entre eulx et autres cy après nommez l'assotiacion et assemblée aux condicions, charges, clauses et conventions qui s'ensuivent, cest á savoir qu'ils se sont du jour d'huy assemblez et assotiez ensemblement jusques au jour de caresme prenant prochain pour de compagnie aller et se transporter ensemblement en les villes, lieux et endroitz qu'ilz adviseront entre eulx pour représenter et jouer commédies, tragédies, pastoralles et autres jeuz selon qu'ils verront bon estre. Quand aux fraiz qu'il conviendra et sera requis et necessaire de faire soit pour louages de jeuz et maisons, pour la conduitte et voitture de leur bagage et autre despence et fraiz, seront les premiers prins, levez et hostez sur ce qu'ils recepveront. Pour les deniers qu'ilz pourront recepvoir... seront, après lesdits fraiz pr allablement levez et hostez, partagez entre tous lesdits assotiez cy dessus. Scavoir est que lesdits Robineau, Jacault, Dugué et Dallembourg en prendront chacun d'eulx une part par esgalle portion et quand auxdites femmes elles prendront chacune d'elles trois quartz d'une desdites parts, fors ladite Vesnière qui ne prendra que demye part jusques

à d'huy en ung mois prochain seullement, et, ledit temps d'ung mois passé, prendra lesdits trois quartz. Et lors que lesdites parties représenteront pièze où il ne sera requis y avoir que une femme, lesdites Piton et Vesnière représenteront une ung jour et l'autre l'autre jour; et quand il conviendra plusieurs(?) desdites femmes représenter le (?) mesme jour la mesme tragédie, ladite Piton représentera les premiers rolles et ladite Vesnière les secondz, lorsqu'elles scauront lesdits roolles. Sinon où ladite Piton ne pourroict sy promptement aprendre lesdits roolles lorsqu'il seroit requis et que ladite Vesnière les aprist plus tost, en ce cas ladite Vesnière représentera les premiers. Et pour le regard de Toussaictz Dallibert et Jullien Bedeau, Callais Anquetif et François Bedeau qui sont en ladite trouppe seront nourriz entretenuz et desfrayez par lesdits assotiez à commungs fraiz et n'auront aulcun gaigne ne part quelque fut, sinon lesdits Dallibert et Jullien Bedeau que, le jour de caresme prenant prochaing venu, prendront chacun demye part pour le temps qui pourra lors rester à escheoir seulement, auquel jour de caresme prenant sera baillé, aux despent commungs desdits assotiez, ausdits Dallibert et Jullien Bedeau chacun ung habit pour leur usage et rescompance du service qu'ilz pourroient faire en ladite assotiacion jusque audit jour. Au surplus se garderont les assotiez toutte loyaulté, fidellité et amitié entre eulx, procureront leur gaing quelque fut, esviteront les pertes et dommages à leur possibilité, sans se faire ne dire par soy, ne par personne interposée, ne souffrir estre faict aulcun tort, dommage, injure ne desplaisir; que si aulcuns leur est faict, tascheront ensemble les faire réparer. Au cas qu'il intervienne entre eulx quelque querelle ou débat seront paciffiez et accordez par les autres de ladite compagnie avec le plus de dousseur et amitié que fera se pourra; ce qu'ilz ont promis et jur, stippull et accepte, dont ilz en sont demeurez d'accord ..... respectivement obligez et obligent leurs corps à tous ..... royaulx ... Sy fut faict et passé audit Angers maison et présence de Mathurin(?) Le Jay sieur de la Verinière(?)
et aussy en la présence de Jehan Gangneur orphevre et Michel Guillet demeurant à Angers; ladite Piton a dit ne scavoir signer.

Robineau

Dalanbour Jacquault

Daniel Dugué Le Jay

Callais Anquetif

Gangneur Veniere

Guillot

1 Société 19. aoust 1603.

Lin Commoduction

Robincau

Daniel Auguste

Calleau augustif

Vimgrisur

Vémere

Millot

シュレナ

── ヒロイズムの終焉 ──

小　林　　卓

1　政治ゲーム

パルティアの国王オロドは、最大の敵ローマ人を敗ってローマの脅威を減じ、かつ、隣国アルメニアを属国として、一見すると最大の軍事的・政治的成功をおさめたかに見える。望外な結末に喜びながらも、明敏なオロドは自身の体制の不安定要因を見逃さない。それは、ローマ軍を破った将軍シュレナの声望と実力の高まりが、王政に不安を与え脅威にすら成ってることである。シュレナは、すでにオロド王を支える政治的重臣であった。なぜなら、王位を離れ不遇をかこっていたオロドを支援して王位に就かせたのはシュレナだったからである。

『シュレナ一人がわしを異境の地から呼び戻してくれた。彼一人が、盗まれたもの、王笏を取り返してくれた。』

Suréna de l'exil lui seul m'a rappelé;
Il m'a rendu lui seul ce qu'on m'avait volé,
Mon sceptre;　711-713

そして、いまローマ軍という最大の脅威を破った事によって、シュレナは有力な家臣というより、王が脅威すら覚えるような政治的存在となった。外敵の排除という課題を達成したあとに、内なる強力な臣下をどのように処遇すべきかという課題が現われたのである。王は部下シヤスに打ち明ける。

『報い様のないほど仕えられるのも、恩義が重なれば、うっとうしいものよ。』
『忠義なるものは快からず、有用なるものは窮屈』
『彼の名声と富において、富は重石であり名声はうるさい』

un service au-dessus de toute récompense
A force d'obliger tient presque lieu d'offence: 705-706
Le plus zélé déplait, le plus utile gène,　709
Et dans tout ce qu'il a de nom et de fortune,
Sa fortune me pèse, et son nom m'importune.　721-722

シュレナの脅威が現実のものであるか、あるいは、根拠のあるものであるかと言うことは問われずに、王の不安な心理によって増幅され、悪夢のように王のオプセッションとなる。

『王位を分けようか、もし王位の大黒柱に甘んじなかったら、すべて彼のものとなろう。わしが王位を嘆き悲しんでも、彼は城壁を撃ち破ってくるだろう。たとえ神々に祈って

も、彼は戦いに勝利するだろう。それを思えば、震え、赤くなり、腹が立つ。そして、いつの日か、彼が実力で取り立てに来るのではないかと心配してる。』

Lui partager mon trône? Il serait tout à lui,
S'il n'avait mieux aimé n'en être que l'appui.
Quand j'en pleurais la perte, il forçait des murailles,
Quand j'invoquais mes dieux, il gagnait des batailles.
J'en frémis, j'en rougis, je m'en indigne, et crains
Qu'il n'ose quelque jour s'en payer par ses mains; 715-720

シュレナが自らの武力と声望を頼りに、自らに取って変わろうとするのではないとまで王は、おびえる。こうした例は、実はオロドが弱い王であることを示しているのだが、シュレナの処遇問題が、王権にとって最大の政治的懸案となったのである。

もっとも、国王も手を拱いてこうした事態を招いたのではない。アルメニアのアルタバズ王の征服には、オロド自らが向かい、ローマ軍にはシュレナを当たらせたのは、アルメニアの攻略は比較的簡単であるが、ローマ軍は名だたる難敵である。シュレナでも苦境に立たされるであろう。その時、アルメニアを攻めたオロドが援軍としてやって来てシュレナに合流し、ローマ軍を破れば、勝利の栄誉は、シュレナではなく王自身のものとなると読んだからである。ところが、王の読みは外れて、シュレナはすばやくも堂々の勝利をおさめ、その名はアジアとヨーロッパに轟き、王を凌いだと言う訳である(1)。

こうした国王の陥った難儀に対して、シヤスは策を提言する。

『政治の英知は、、二つの方途を教えています。シュレナがどのような勲功を挙げたにせよ、何を期待しているにせよ、彼を滅ぼすか、それとも婿となさるかです』

『彼を滅ぼすか、あるいは、御前の安全を確保なさるかいずれかでなければなりません。中間はないのです』

La saine politique a deux extrêmités.
Quoi qu'ait fait Surena, quoi qu'il en faille attendre,
Ou faites-le périr, ou faites-en un gendre. 728-730
Il faut, il faut le perdre, ou vous en assurer:
Il n'est point de milieu. 736-737

このドライで、論理的、明快な提言の中にシュレナ問題の政治的解決は尽きている。敢えて整理すれば、王政に取って最善の策は、シュレナを王政と言う体制の内に取り込むことによって、シュレナを安全無害化し、王政の強い味方として利用することである。それが出来ないならば、シュレナを殺すことによって危険分子を除去すること、この二つの選択肢があるということである。オロドは、最善な選択、シュレナを婿にとることによって切り抜けようとした。政治的、道徳的見地からもまことに当然な決断であった。だが、オロドの目論見はまたも外れ、シュレナの暗殺という次善

の方策を取ることを余儀なくされたのである。

本劇の時は、二組の婚姻が挙行されようとする前日におかれている。二組の婚姻とは、オロド王の王子パコリュスとアルメニア国の王女ユリディスの結婚、これはパルティアとアルメニアが結んだ和睦（実質的にはアルメニアの属国化）の徴であり、そして、オロド王の王女マンダヌとシュレナの結婚である。二組の婚姻の行なわれる日は、、オロドがこれまで追求してきた政策の総決算、政治的勝利が打ち立てられる日なのである。戦争の勝利と外交の勝利、および内政においてはシュレナの体制化によって、磐石の王政が確立される晴の日であった。

この決められていた結婚がならなかった経緯が、本劇の実質となっており、そこには様々な人間的な、感情的な、また政治的な葛藤が展開されて面白いが、紙数の都合でデテールを追うのは省略する。簡単に言えば、それぞれの結婚に対するシュレナの拒絶、ユリディスの忌避に出会ったことがオロド王の目論見が失敗した理由である。オロド王は純粋な政治的人間であり、彼自身が結婚の当事者でもないので、このようなケースによくみられがちな感情的なトラブルで足を掬われた訳ではない。そもそも、結婚とはオロドにとって政治そのものであり感情問題ではない。

『我々が結婚せねばならないのは、王子をたくさん儲けて、王笏の支柱、国々の守りとするためよ。我らの力はそこにある。復讐がかなわぬのでは、謀反を勇気づけるのみ。そして、我らの縁組においては、国家の利害が、美貌に目を塞ぎ、愛に心を閉ざすのだ。我らを動かすのはただ政略のみ。それが第一。愛情が混じることもあろう。あれば喝采し、なければ諦める。』

Il nous faut un hymen, pour nous donner des princes
Qui soient l'appui du sceptre et l'espoir des provinces:
C'est là qu'est notre force; et dans nos grands destins,
Le manque de vengeurs enhardit les mutins.
Du reste en ces grands nœuds l'Etat qui s'interesse
Ferme l'œil aux attraits et l'âme à la tendresse:
La seule politique est ce qui nous émeut;
On la suit, et l'amour s'y mêle comme il peut:
S'il vient,on l'applaudit; s'il manque, on s'en console.

1029-1037

オロドが追求するのは、王政の安定と確立に他ならないのであるから、それに直接関係しないものについてはいくらでも妥協することが出来た。例えば、王はシュレナを介してユリディスがパコリュスとの結婚を望んではいないことを知ると、王子とユリディスの結婚を破棄してもよいとほのめかしたりする。また、シュレナの頑固な抵抗に出会って、ついには王女マンダヌとシュレナとの結婚にさえこだわらないという態度にでる。彼が望み決めた結婚の組合せさえ取り下げてよいと言う王の態度からは、オロドがどれほどの妥協と譲歩を見せたかうかがえよう。

オロドが、シュレナに求めた最後の和解策とは、誰かと結婚すること、誰でもよいが王にとって脅威にならない相手を選ぶこと、この二点であった。このことは、シュレナに行動の自由を渡さないと言うことを意味する。シュレナが自由な存在であること、どの様な行動に走るか分からないと言うことが、王に取って最も不安な憂慮すべき事であった。従って、オロドはシュレナという脅威をなくすためにミニマムな条件まで降りた訳である。政治的柔軟性と言うより、オロドの王としての弱さが露呈したと言うべきであろう。これさえ拒否されて、オロドは万策尽きたのであった。

『ふさわしい連合いを選ぶがよい、どの様な点に関しても、わしが羨むことのないような連合いを』

Choisissez un parti qui soit digne de vous,
Et qui surtout n'ait rien à me rendre jaloux:　　947-948

ここで、当時ホットな政治的トピックであった問題、マキャベリスム[(2)]に、もとよりここではコルネイユ劇に限定してであるが触れておきたい。コルネイユ劇においては、相対立する二つの政治的イデオロギーが出現する。一つは王権神授説を基礎とする正統王政のイデオロギーであり、当時の公認のイデオロギーであるとともに作者コルネイユ自身が信奉する政治的信条でもあった。一般的に言えば、それはもう一つのコルネイユ劇の思想的バックボーンであるヒロイズムの政治的基盤であり、正統王政イデオロギーとヒロイズムの幸運な連携こそコルネイユの理想であった。他方が、マキャベリスムである。それは反正統王政派、即ち、僭首、堕落した王、簒奪者などの血統によらずに実力で権力を手にいれたり、不当に権力を行使する全てのものの奉ずるイデオロギーであり、反ヒロイズムであり、不道徳、腐敗、堕落の政治として貶められている。正統王政対マキャベリスムの角逐は、『ポンペ』以来コルネイユ劇の頻出の政治的主題となったが、本劇でも、オロドの政治的手法はマキャベリスムという観点から見られ批評されており、オロドは僭首でも簒奪者でもないのであるから、堕落した王、王としての責務を果たせない政治的・精神的にも弱い王として糾弾され、彼の政治は腐敗した王政の見本とみられているのである。

ところで、こうしたコルネイユ的、あるいは17世紀的偏見から離れて、今日でさえ持っているマキャベリスムという蔑称が含意する様々な意味を払い落として、より客観的にみれば、マキャベリスムは伝統的な政治思想が纏っていた道徳や神学を離れて、政治というゲームに対して沈着冷静に合理的に対処し分析しようとする新しい態度の誕生と評価出来るし、事実、それは近代政治学の先駆でもあったのである。オロド王の方策をマキャベリスティックと形容することに反対はしないが、そこに道徳的裁断を強く含ませるべきではないだろう。オロド王に過失があったすれば、シュレナに対して必要以上の不安を抱き、王として自らを貶めるほどの譲歩をした、弱さにあったと言うべきであり、彼の行為は道徳的過失と言うより政治的失策である。

オロド王の行為がマキャベリスムという非難を受けるのは、（今日のコルネイユの評家達さえからも）、シュレナを暗殺した事である。しかし、道徳的な判断を停止して、オロド王の政治的企図を辿って行けば、シュレナの暗殺は必然的な帰結であった。他の解決策はことごとく捨てられ、

つぶされ、放棄されたのである。オロド側の事情は触れたので、今度はシュレナの立場から見てみよう。すると、彼の輝かしい軍事的成功の裏に、悲しむべき政治的無知、無能が潜んでいる事が明白となる。シュレナは宮廷社会に生きて、かつ将軍という地位にある以上政治的人間であるはずだが、実際は全くの非政治的人間として振舞った。まず、彼は自分自身の存在が、オロド王に脅威を与えていること、政治的不安定をもたらしていることを十分に認識していない。確かに、そうなったのは彼の意図したところではないし、彼の責任でもないが、余りもの現状認識の甘さである。また、王が事態の打開のために出した様々な提案に対しても拒否を繰り返すのみで、有効な代案を出すことはない。自分とマンダヌとの結婚に代わって、パコリュスとシュレナの妹パルミスとの結婚を提案するが、これが王を満足させなかったのは言うまでもない。シュレナ自身の処遇については何も触れられていないからである。

シュレナとすれば、愛するユリディスとの結婚が実現できれば最上であるのだが、その実現性がないことは彼とて知らないわけではない。そこで、少なくともシュレナは、自身については誰とも結婚しないことによってユリディスとの愛の証としようとしたのである。そのため、王女マンダヌとの結婚を拒否し、さらに誰とも結婚しないことによって独身を確保しようとしたのである。シュレナが確保しようとした独身とは、実態はユリディス一人への忠誠という拘束を意味していた。だが、政治的には、シュレナがいつ王権を転覆するかも知れない自由を手放さなかったことを意味するものであった。こうして、王とシュレナの利害は相容れないものとなり、真っ向から対立するのだが、ここに政治的解決の道が全くなかったとはいい切れまい。少なくとも、オロドは解決への道を探りなすべき譲歩も繰り出したのに比して、シュレナはオロド王が抱えた政治的課題について明察を欠くとともに、その解決に非協力であった。このような、シュレナがみせた政治的秩序の建設、政治的統合への無関心、非協力は、政治的人間たるオロドの理解を越えたであろうし、実際シュレナの身分や地位を考慮すると不可解な奇妙な態度である。彼が王の最終提案を拒んだときに、来るべきものは暗殺であることは誰の目にも明かであった。ユリディスや妹のパルミスが、警告を与え逃亡を勧めたにも関わらず、シュレナは何の手だてを打つことなく死を甘受した。逃亡することもなく、反逆することもなく、いっぺんの抗議の声すらあげず、あたかも、自らの生死にさえ関心を失ったかのようにである。このようなシュレナの非政治的振舞い、あるいは政治的無関心の由来するところはなんであろうか。政治へのまったき絶望であろうか。確かにそれらしい言葉を、彼は死の直前に口にする。彼は、暗殺を目前にして政治への一般的な告発を披歴している。

『自然の情に反して、国王の半分は肉親殺しから生まれているときに、支配権のために兄弟の血で手を汚し、息子は、父の死を今かと待っている』

Quand malgré la nature, en dépit de ses lois,
Le parricide a fait la moitié de nos rois,
Qu'un frère pour régner se baigne au sang d'un frère,
Qu'un fils impatient prévient la mort d'un père?　1639-1642

死の直前の絶望的状況で発せられた言葉であるだけ割り引いて受け取らねばならず、このような口実が、シュレナの非政治的な自らの責務を放棄した振舞いを正当化できるとも思えない。政治という汚れに身を沈めたくないならば、何故彼はオロド王を助け、王位につかせたのかと言う疑問が浮かぶ。オロドを復位させることによって、王政の再建を計ったためだろうか。とすれば、オロド王の政治的企図についての非協力ぶりは納得しがたい。シュレナには、根本的な政治的動機というものが欠けているし、彼の政治的行動には一貫性がない。行動において一貫性の無さは致命的である。この点を見れば、シュレナは非政治的と言うより政治的無能と評されるべきである。シュレナの政治的抹殺は、ほとんど運命的と言えるほどに彼の行動からしても不可避であったのだ。

王と英雄の関係もコルネイユ劇中重要な主題をなし、関係の裏表が考察されているが、一般的に言えば両者は相携えて、英雄は王に力を貸し貢献し、王は英雄に庇護と恩恵を与えるものであった。しかし、こうした蜜月関係は遠くなり後期の作品では稀になる。ことに、本劇においては、英雄が存分に力を発揮して並外れた武勲を上げても、それが王権の強化や国家の創建に結実せず、逆に王の英雄への不信という形でネガティブにかえって来るのである。英雄の功績を正しく王政が受け入れないと言う意味で、本劇に王政の退廃を読み込むことは正しい[(3)]。オロド王の王政に、根本的な脆弱という堕落がみられることは前述した通りである。

王政的秩序の退廃、喪失の渦中、報われぬことなく悲運の運命に倒れた英雄はいくらもいる。セルトリウスをその代表にあげよう。同じく王政的秩序の喪失中、艱難辛苦のあげく最後に報酬を得た英雄もいる。『ロドギュンヌ』のアンティオキュスがその例であろう。成功した、失敗したは別にして、セルトリウスにはローマの再建という大いなる抱負があり、アンチオキュスには王位の継承、そして正統な王による王政の復権という望みがあった。つまりは、政治的な動機とビジョンがあった。だが、シュレナにはそのようなものはない。彼はオロドをもり立て王位に戻し、ローマの侵略に対抗して国難を救った。だが、何のためにと問われても答えようがないのである。彼の英雄的な功績も偉大も、単なる戦士の武勲に過ぎず、何の政治的な統合、価値に結びつく事なく空しく浪費されたのみである。

シュレナはたまたま堕落し腐敗した王政に直面すると言う不運を背負ったのだと言えるかも知れない。オロドが然るべき王であったならば、シュレナの英雄的行為は意味を与えられ、然るべき政治的機能を果たしたであろうと。しかし、シュレナの英雄としての純度はそれほど高いものであろうか。彼がオロドと政治的に連合してこれまでやってきたにも関わらず、最後の詰めで離れたのはなぜか。オロド王の王政が血にまみれた惨劇でしかないことを明かし、そうした政治世界からの離脱を望むかのような口吻を漏らすが、それは、シュレナの経歴を見たとき弱々しい抗弁でしかない。本当の理由は、彼がユリディスとの間に育んだ愛にあった。成就することのない愛に身を任せ、それを断念する真の勇気を持たなかったことが、シュレナを政治的アパシーに追い込み、英雄としての高みから失墜させたのである。

本劇においては、かつてのようにもはや英雄の武勲が理想的王政の援護を受けて華麗に華さく

状況ではなくなってしまっている。理想的王の登場は期待されるべくなく、もっと現実的ないわばマキャベリスティックな王権に相対しなければならないのである。より一層リアリスティックになった、厳しい政治ゲームの中で英雄はその企図を実現しなければ成らず、挫折に終わるとしても無理のないことであった。問題は、シュレナが現状の打開について何の役割をも果たそうとせずに、全くの政治的無能と無知の限りを尽くし、オロド王の政治的課題を解決するための助力も共同も出来ず、果ては、自らの暗殺を無抵抗に甘受することになった点である。このような政治世界からの離脱の底には、シュレナの内面における英雄としての失墜が潜んでいたのである。以上からみられるように、シュレナをオロド王のマキャベリスムの犠牲者と捉えるのは単純化した見方である。シュレナの暗殺は、政治的算術からすれば当然な帰結、論理的結果である。その責任は、オロドとシュレナの双方にあったと言うべきである。一方的にオロドの道徳的資質に関わるものではない。

道徳的神学的な仮面がはがされたマキャベリスティックな政治世界は、当然なことに合理的で戦略的なゲームと化していく。シュレナに根本的な政治的動機が欠けていると言ったが、それはオロド王とて同然である。もはや王は、神の地上における代理人ではなく、神が預けた高貴な使命を帯びてもいない。王権の保持と拡大という得点を目指しながら、政治というゲームに興じるプレイヤーに過ぎないのである。こうした観点に立つ限り、オロドはかなり見事に老練にプレイを演じたが、華々しい勝利は獲られなかった。シュレナの抹殺は、王にとっても痛手であったからである。シュレナは、オロドがもくろんだゲームを受け入れず、プレイを拒否した。シュレナは、政治ゲームにおいてオロド王の敵手として登場したのではなく、そもそもゲームに参加しなかったのである。もし言えるならば、政治というゲームそのものから降りていたのである。従って、きわめて政治的人間であったオロドが読みをはずしたのは、シュレナが非政治的人間として振舞い、彼と同等の政治的次元に立たなかった故であった。

2　人間的絆としての愛

シュレナがオロド王の娘マンダヌとの結婚を拒否したのは、表面的理由[4]はさておき、根本的にはユリディスとの愛のためだと言える。もし、シュレナとユリディスの愛がなかったならば、シュレナがオロドの要請を拒否することはなかっただろう。前述したように、シュレナの暗殺は政治力学の過酷な論理による帰結ではあるが、こうした政治的結末に至った理由をシュレナの内面に求めれば、ユリディスとの愛にあったのである。ところで、この愛とはどのようなものであったか。

この愛もこれまでのコルネイユ劇に見られた愛と違って独自な面を持っていた。感覚の衝撃という官能の中に誕生し、常にエロチスムの香りを漂わせたコルネイユ的愛[5]と違って、大変禁欲的であるとともに、寡黙な秘めた愛であった。ユリディスの美貌、美貌が約束する享楽という肉感的

な事柄を語るのは、パコリュスがユリディスにする愛の口舌においてでありシュレナの言葉には見られず、パコリュスとパルミスの愛が饒舌な出来合いのギャラントリーに終始するのとは対照的に、シュレナとユリディスには、そうしたものはいっさいみられない。二人の愛は、実現性の全くない禁断の愛であるのみならず、王子パコリュスの婚約者となってしまったユリディスと愛を育むことは政治的重罪にも相当するから、二人の愛は社会に向かって徹底的に隠匿せねばならなかった。そのような社会的な事情を斟酌しても、二人の愛は初めから隠れ、人目を忍ぶ。

『彼は私の心をかち取ったのです。私の目は彼に魅了されてしまい、隠された心の内を不意に彼の目に顕したのです。言葉にならないもの言いによって、彼に隠そうと努めていたことがあらわになったのです。そして、彼の恋心を私に示した同じ視線が、私の視線から私の心の奥の秘密を盗んだのです。』

Il l'obtint, et mes yeux, que charmait sa présence,
Soudain avec les siens en firent confidence.
Ces muets truchements surent lui révéler
Ce que je me forçais à lui dissimuler,
Et les mêmes regards qui m'expliquaient sa flâmme
S'instruisaient dans les miens du secret de mon ame. 49-54

ユリディスは確かにシュレナに向かってマンダヌとの結婚を禁じたが、他の女との結婚まで禁じたのではない。ユリディス自身がシュレナに結婚を勧めている。

『後生のために、あなた様は子孫を残さねばなりません。あの名高き死者たちは、殿が今その身代りとなっておいでですが、一門の内に生き返って来なければなりません。私はその血筋を絶やそうとは思いません。もしそうした願いをほんの僅かでも漏らすようなことがあれば、大逆罪を犯したとみます。』

A la postérité vous devez des neveux;
Et ces illustres morts dont vous tenez la place
Ont assez mérité de revivre en leur race:
Je ne veux pas l'éteindre, et tiendrais à forfait
Qu'il m'en fît échappé le plus léger souhait. 296-300

ユリディスの結婚の勧めには、子孫を残すためという社会的な理由がつくのだが、血統こそ当時の公認のイデオロギーの支えであり、結婚という制度の支柱であった。ユリディスの言葉を信じるならば、シュレナはマンダヌ以外の女性、オロド王が少しも脅威を覚えない相手と結婚することはできた訳である。つまり、オロドとの政治的妥協の余地はあったのである。しかし、シュレナはユリディスの勧めを受け入れなかった。それは、シュレナの自発性というよりユリディスの真意を推し量ったからであろう。先ほどの言葉は、いわば社会的体裁を被った言であって、ユリディスがシュレナを誰にも渡そうとしたくないことは、彼女の態度から明白であった。ユリディスの非妥協的な

態度からは、シュレナが他の女のものになるよりシュレナが死んだ方がましだという結論が論理的に出て来るはずだが、もとよりそのようなことをユリディスが明言できるはずがない。むしろ、先ほどのような逆の言葉が出て来る。シュレナは、暗黙のうちにユリディスの心を受け取り、自ら死に赴いたのである。この点、ユリディスの愛は、エゴイスティックなものを含んでいた。事実、シュレナの妹のパルミスは、この点を追求して、最後には、ユリディスから愛を断念すると言う言葉を引き出したほどである[6]。しかし、暗黙の内の死の了解には、生死を越えた何かを二人の絆に見いだした為と解釈する方が、二人のためには親切であろう。

シュレナとユリディスが結婚という形で結ばれる可能性は、政治的状況から全くなかった。二人がそれぞれ自由の身でいて、心情において結ぶ可能性はどうかと言えばやはりなかった。ユリディスはアルメニアの王女と言う身分に束縛されて自身の自由を持っていなかったし、シュレナは先にみた通り政治的力学から解放され得なかったのである。それ故に、二人の愛は潜伏し、内向し、二人だけが内密に結んだつながりと言うべき性質のものとなった。パコリュスの執拗な詮索をかわすためにもそうなる必要があった。こうして、二人の愛は結婚へと通ずる表街道を行けず、と言って私的な感情として育むこともならず、内に潜り隠れた場所で秘かに保持するものとなったのである。禁欲的で内閉的な愛となった二人の愛は、二人を結ぶ連帯、あるいは絆のシンボルと言うべきものであった。実現不可能な絶望的な愛と言っても、それ故に内圧が高まり果ては情念の奔流となって愛する者を打ちのめすと言うラシーヌ的世界が現われるのではない。情念は濾過され、静かな浄化された感情となって、現実の苦難にぶち当たった二人の人間を結ぶ絆となったのである。この絆の保持に、シュレナは彼の存在を賭けた。政治世界における王との闘争に敗退した根本的理由はここにあった。

彼等の愛の独自な性格を評価するに際して、伝統的なロマンチック・ラブと混同する誤解は、避けるべきであろう。愛という人間的な感情や価値を無視、あるいは軽視するオロドに代表される政治的人間の価値観への異議申し立てとして、二人の愛を捉えようする解釈がある。それによれば、政治と愛という二つの価値が対立し、優劣を争うものと言うことになる。シュレナが王子パコリュスにした感動的な科白などそうした見方を支持するように見える。

『心情の世界は、政治の支配するところではございませんし、愛は自らを貴び、国王や至上の権力を認めないのです』

Que l'empire des cœurs n'est pas de votre empiré,
Et que l'amour, jaloux do son autorité,
Ne reconnaît ni roi ni souveraineté?　　1310-1312

愛はそれ自体至上の価値を持っており、政治的権力の支配できないものであると言う主張は、遠く『オラース』におけるカミーユの態度を思わせる。もっとも、カミーユのように激越な主張ではなく、シュレナでは控えめな抗議という体裁を取っている。シュレナとユリディスの愛に、愛の絶対価値化にまで至る情念の高まりを認めることはとうてい出来ないのである。この世の一切を放

棄した人間同士の、相互認識・連帯の徴と言うべきものであって、価値として立てる積極的な自己主張を持たないからである。あるいは愛を政治的価値よりも優位とする考えを二人に帰すことも当を得ない。愛という個人的・私的な感情を政治的価値よりも優先させるには、二人は余りにも身分が高すぎ、宮廷という政治的世界に浸かっていたからである。彼らの愛は、二人だけの人間的な結びつきにとどまり、その向こうにはいかなる神話的な眩暈もない。例えば、この世ではありえなかった愛の成就をあの世に期すと言う主題は影もなく、二人の愛を伝説化しようとするいかなる試みも見られない。

コルネイユ劇において、愛は通常幸福のシンボルであり、多くの場合政治的責任のために、愛という幸福を放棄することになるのだが、シュレナとユリディスの愛は、決して幸福を意味していないのである。愛とは、この世の確かな最後の幸福を探し求むべき隠れ家ではもはやなくなったのだ。シュレナが用いる幸福 bonheur, heureux と言う語の皮肉な用法をみられたい。

『何という幸せ！　敢えて言いますならば、わが恋が願う取るに足りない幸福です』

『幸福な生活に思いをお向けください。そして、私に死なせてください』

Que je serais heureux! Mais qu'osé-je vous dire
L'indigne et vain bonheur où mon amour aspire!　1561-1562
Songez à vivre heureuse, et me laissez mourir.　1564

こうして、愛の自然の起源であるエロスから遠く離れ、様々な精神的・人間的価値付けも持たず、独自の相貌を帯びた二人の結合は、苦痛や死と等価におかれたのである。ユリディスがシュレナに漏らす言葉には、souffrir, souffrance(244) languir, langueur(261-262) noir chagrin(265) amertume(266) douleureuse et fatale tendresse(270)と言った言葉が頻出する。そして、二人の愛のみならず生を要約する科白が、ユリディスとシュレナの双方によって唱和される。

『いつも愛し、いつも苦しみ、いつも死ぬ』

(je veux) Toujours aimer, toujours souffrir, toujours mourir.　268
O Ciel, s'il faut toujours aimer, souffrir, mourir!　368

愛と苦と死が何の矛盾もなく結びつき、ここでは愛がある価値の実現という積極的な意味合いを失ってしまい、いわば一切の放棄、政治的世界における役割と責任の分担のみならず、愛における自己実現をも放棄する事を意味したのである。二人の愛とは、すべてを擲ったものが、唯一この世に確保しようした刻印とも言うべきものである。

3　ヒロイズムの終焉

ところで、もう少しシュレナの内面に目を注げば、彼の内面の独自な有様から彼の行動を理解

する鍵を見つけることが出来よう。

『私とともに全てが滅びるがよい、宮、私の死後、この地上を誰が生きようとどうでもよい。かの誉れ高い先祖といっても、暗黒の墓場に光が射すとでも言うのだろうか。』

『我々を照らす陽の光が消えてしまえば、死後の生など絵空事に過ぎない。

冷たく、空しい永遠よりも、望んだ幸福を一瞬にせよ手にする方が勝る。』

Que tout meure avec moi, Madame: que m'importe
Qui foule après ma mort la terre qui me porte?
Sentiront-ils percer par un éclat nouveau,
Ces illustres aïeux, la nuit de leur tombeau? 301-304
Quand nous avons perdu le jour qui nous éclaire,
Cette sorte de vie est bien imaginaire,
Et le moindre moment d'un bonheur souhaite
Vaut mieux qu'une si froide et vaine éternité. 309-312

このような言葉が、コルネイユ的英雄の口から聞かれるとは、初めてであり全く思いもかけないことであった。コルネイユの英雄達が待望した不滅の栄光、不滅の名声は輝きを失い空しい永遠に変じ、この世におけるいっぺんの幸福に劣るものとなってしまったのである。シュレナの言葉は、コルネイユ劇の思想的バックボーンであったヒロイズムを無惨にも否定したものである。こうした変化は、ヒロイズムが何の実を結ぶこともできないほど政治的状況が悪化したためであるとし、コルネイユは、最後の作品でヒロイズムについてきわめて現実的な醒めた態度を取ったのだとする考えもある。しかし、政治的に悪い状況、あるいは絶望的な状況はこれまで幾度もコルネイユ劇が扱ってきたところである。『ロドギュンヌ』『エラクリウス』『セルトリウス』『アッチラ』といくらでも挙げられる。また、そうした作品において、英雄たちが必ずしも最終的な成功を収めた訳ではない。敗北を喫した例もあるのである。問題は、英雄たちの成功・失敗ではない。シュレナの科白と態度・行動を見て印象づけられるのは、政治的状況の悪化よりももっと根底的な部分、精神とモラルにおける質的変化であり、これまでの英雄たちの示した態度との断層である。かつての英雄達が身に挺した確信と高揚の時は、遠く過ぎ去りもはや戻って来ない。かつて多くの英雄達が信じた諸々の政治的価値、政治的統合の実現、正統王政的秩序の再建や維持、マキャベリスムの打倒、あるいはそうした事業にともなう諸々の精神的倫理的価値、武勇、高邁、友情、栄光と名声、と言った偶像、そのために生命や幸福を犠牲にしてもよいと信じた「永遠」は、シュレナにおいて死に絶えたのである。シュレナに数々の英雄的形姿をみとめることができるにせよ、彼の内でヒロイズムは死に、コルネイユの最後の作品に登場する英雄が自らヒロイズムの終焉を宣告したのである。シュレナが保持したものは、ただ一つユリディスとシュレナが過酷な政治ゲームの渦中にあって守り通した人間的絆のシンボルとしての愛のみであった。

このことをどう評価するか。ことは簡単ではないが、私なりに整理すれば、シュレナの英雄的

純度は明らかに下がっており、ヒロイズムという見地からみる限りシュレナは失墜した。とは言え、シュレナの敗北がヒロイズムの敗北をただちに意味するのではない。先に引用したシュレナのニヒリスティックな発言も、割り引いて受け取る必要があろう。オラースやオギュストと言った英雄的高みに昇り得なかった非英雄の発言だからである。もっとも、失墜した英雄に、ある人間性を認めることはできないことではない。ヒロイックな価値と行為を否認したにせよ、ユリディスとの愛という人間的価値の保持に賭した行為に、かえって内面化・精神化したヒロイズムを認めたいとする人もいるのである。しかし、ヒロイズムとは本来人間性の純化と高揚を含むのであって、ヒロイズムと人間性は分裂したり、対立するものではないのである。言うなれば、シュレナのヒロイズムが堕落したのと同じくらい、シュレナとユリディスの愛も袋小路に入った行き場のない「失墜」を見せたものである。彼らの愛は、決して純度の高いヒロイックな愛ではない。

ステグマン[7]は、シュレナとユリディスが保持した愛に注目し、この愛の精神的価値を評して人間的自由の最後の隠れ家と言っている。ドルト[8]、ドゥブロフスキー[9]の両者は、この作品をヒロイズムの敗北を検証したものととらえ、次なる歴史的ステップへの弁証法的契機としている。ともに、ヒロイズムの終焉を、ヒロイズムの敗北、ないし否定と理解し、その意味合いを精神的・倫理的、あるいはイデオロギー的に位置づけている。ステグマンは、シュレナの非政治性、非英雄性を過小評価し、相変わらずロマンティック・ラブと言う愛の絶対価値づけの伝統に身をおいて、愛の過大評価にとどまっている。ドルト、ドゥブロフスキーは、コルネイユ劇には非関与的な歴史的弁証法や主人と奴隷のヘーゲル的弁証法という問題を、コルネイユ劇にずらして読み込んだものであり、彼らに取ってはヒロイズムは敗北すべき必然を本質的に有しているのである。だからといって、コルネイユのヒロイズムが敗北を含意していると即断することはできないだろう。

長い劇作の年月において、コルネイユはいつもヒロイズムのスポークスマンであったし、今日でも一般的にはそのように理解されている。彼の内に、ヒロイズムの否定、無効と言った思想を認めることは妥当ではない。ただ最後の作品において、明確にヒロイズムの終焉を描いたことは、それ自体意義深い変化であるとともにヒロイズムを中心の価値として展開してきたコルネイユの劇世界に深い陰影をもたらすことになった。このことは、とかくヒロイズムという光輝の影に押しやられがちであった諸人物、『オラース』におけるカミーユ、『ロドギュンヌ』におけるセルーキュスなどの理解に照明を当てることになろう。コルネイユがこうした非英雄的あるいは反英雄的人物を多かれ少なかれ描いていたことはもっと注目してよいことである。余りにも一面的なヒロイズムの理解は訂正されねばならないのである。

参照文献

A) Corneille, œuvres complètes édition par A. Stegmann Seuil 引用は、この版による。

B) Corneille, Suréna général des Partes édition par J. Sanchez Nizet

C) Dort B, Corneille dramaturge L'Arche

D) Doubrovsky S, Corneille et la dialectique du héros Gallimard

E) Nadal O, Le sentiment de l'amour dans l'œuvre de Pierre Corneille Gallimard

F) Stegmann A, L'héroisme cornélien Armand Colin

G) Stegmann A, L'œuvre de Corneille Hachette

註

(1) こうした政治的、歴史的事情については、コルネイユは史実を正確に追っている。詳細は、B)のサンシェの解説を参照。

(2) 当時の知的・思想的背景、とりわけマキャベリスムの問題については、F)を参照。

(3) cf B)p. 86

(4) シュレナが王にした断わり方は、宮廷人の老練と知恵を示す見本のようなものである。cf 815-844

(5) 特に初期の喜劇と前期の悲劇に著しい。 cf E)

(6) 五幕４場、しかし、時は遅すぎた。

(7) cf F)tomeII G)p. 108

(8) cf C)

(9) cf D)

薄幸の小姓（その3）

トリスタン・レルミット
野　池　恵　子　訳

22. 薄幸の小姓はロンドンに到着し、商人の家で非運に遭遇する。

私があの哲学者から厄介になるよう言われていた商人の家に着いたところ、家の主は持って行った手紙を読むや、すぐさま私に何度も愛撫を繰り返しておこなって、一家の子供と同じ扱いをするよう命じました。この商人はかなりの金満家で、遠国との商取り引きを数多く手がけてい、少なくとも装備の行きとどいた船を二、三隻は所有していました。ここで私の困ったことといえば、私の言葉のわかる人間が商人ひとりしかいず、何かの所用でこの人が外出してしまうと必要なものをどうやって頼んだらよいかわからなくなってしまうことでした。その不便に不満をこぼすため、私は旅中に好遇を得た司厨長の投宿する料亭にでかけて行きました。するとそこにいあわせたたある礼儀正しい男が、私の苦労しているのに同情してロンドンで印刷された小冊子を一冊くれ、それで必要と思われることすべてについてどう言うかがわかったのです。私はたちまちのうちに本一冊を暗唱してしまい、また家の召使いたちが喜んで私の学習を手助けしようとしてくれたおかげもあって、なまりなく発音することまでできるようになりました。ところが、新しい知識は私に便利な思いをさせてくれるはずでしたが、現実にはひどく不便な目にあわされることとなってしまいました。商人の家には仲買の役を勤める近親の者が一人い、この男の夫人がかなりの美人だったのです。少なくとも、色白で血色がよく、健康で、せいぜい二十二、三歳ぐらいにしかなっていませんでした。夫がまったく風采のあがらなかったこの婦人から、私は始終流し目を使われ、愛の営みへ乗りだすよう誘いかけられたのです。私は気がついていました、彼女が目を大きく見開いて私をみつめ、こっそりと秋波を送っていたことに。また、この国の言葉を私が覚え使うのを彼女が大きな悦びを感じながら聞いていたということにも。ある晩、家人が余りいず、また、いる者も地下室の一隅に何トンもある商品をおろすので忙しかった折、彼女は私の私室にやってき、まるで私が理解しているかのように振る舞って、感動をこめてある話をしはじめ、数分ものあいだそれについて話し続けるのでした。私は話に対してはなにも答えられませんでした。しかし、彼女は私が無視したのだと信じる風をし、先の話をもっと激しい口調で話しなおすのです。ようやくこちらの辛抱に彼女が嫌気を催してきたので、今度は私がこちらの話を身振りを使って伝えようとしたところ、突然、彼女はさよなら（グッド・バイ）の一言しか言い残さないで立ち去ってしまいました。そののちも、何度か部屋に通ってきて、私には理解不能の自分勝手な話しを私に引き続き聞かせました。そういう時は、話の先が見えなくなるのではないかと恐れたのでしょうか、中断するのを嫌がるのです。私は言われているこ

とがさっぱりわからず、この艶めかしいおつきあいにはさんざん悩まされましたが、ある事件がきっかけとなって、茶番劇も幕を閉じることとなりました。ある晩、この婦人の夫が街で大盤ぶるまいをしたすえ自分もひどく飲みすぎ、別にそれだからと言ってとがめだてされることもなく、この界隈に戻ってきた時のことです。バッカス神の仕業としかいえないほどの正体不明の体で、わずかに話す努力だけが見てとれるといった有り様でしたが、その言葉もはっきり発音されていたわけではありません。たえずしゃっくりがでて、何を言っているのかわけがわからないのです。おまけに頭がひどく重いので、足もとが定まらず体の重みですぐによろけてしまいます。度を過ぎて酒を飲む者は、きりなく飲もうとするものですが、この男も家に入るやいなやぶどう酒を運ばせ、夕食の相伴をさせるため家人を呼び寄せるのです。私もそこに行き、それで不快な場面に居合わせることとなりました。悪徳に対し嫌悪の情をつちかうには、悪徳そのもののイメージを描いて見せるほどよいことはなく、子供たちの前で奴隷を酔わせ彼らに節酒を教えたギリシア人たちには、まさに良識が備わっていたのだということを私はこの場で学びました。この仲買人は食卓で何度となくみだらな行為におよび、その言葉およびその振る舞いから、もはや男には人間が他の動物に対し持っている優位性というものが残されていないと判断されました。ところが、夫人のほうはただ微笑んでいるばかりで、夫の例をみて分別を正すということもなく、同じようにして同じ地点に達っそうとするのです。金めっきのほどこされた銀製の船型をしたカップを何度も飲み干すので、そんなことでは理性までも難破してしまうのではないかと、私には疑われました。ついに、夫のほうがテーブルからころげ落ちたため、夫人と召使い二人と私とがようやくのことで、彼を寝床まで連れて行きました。仲買人の世話をしたのち私は私室に戻りましたが、そこに夫人が姿を現し、私の腕を掴んで胴衣を着る暇も私に与えずに、燭台を持って彼女の寝台のある閨房に私を連れて行くのです。力づくで私は従わされて、彼女が私に対し何を望んでいるかわからないままでいると、彼女は寝台の縁に腰をかけてぶどう酒のたっぷり入った大きな瓶を下から取り上げ、足下の床にあった船型のカップをそれで満たすように促します。私は飲みたくないという合図を何度も彼女に送りましたが、彼女の方はそれで満足などせず、カップに酒をついで私の健康を祝して飲むといい、一滴も残さずに飲み干しました。ついで彼女は同じ船に装備を施し、私に同じ風に操縦するよう言います。カップをさしだす手があまりにも震えたため、私に飲ませようとした酒が少しこぼれましたが、私はその液体を全く好まず、カップの中身を飲み干す決意をすることができませんでした。しかし、苦痛を覚えながらも不承不承、カップを口もとまで運んで薬湯を飲もうとした時に、それから逃れるための素晴らしい機会にめぐりあったことに気がつきました。ちょうどその時イギリス女性が、夫が深く寝入っているかどうか確かめようとして、顔を夫の方に向けたのです。私はこの時を巧妙に利用してゆっくりとぶどう酒を肩に流し、胃を傷めるよりはシャツを汚すほうが良いとしたのでした。このバッカスの乱酔した巫女は私の策略には気付かず、何だかわけのわからない激昂にかられて両手を私の髪のなかにいれ、頭を彼女の顔面近くに持って行き、鼻先でしゃっくりをします、心地の良くないことといったらありません。彼女を振り払おうとはしても、しっかり抑えられているので

思うようにならず、しまいには彼女が嘔吐を催し、私の頭は汚されてしまいました。突然飲んだぶどう酒が口からみな吐きだされたのです。この洪水から我が顔を救うためにできたことと言ったら、額を少し下に向けること位のことでした。雷雨で髪はびしょ濡れとなり、おぞましさがわきあがって来て、私は、その無分別な女の手から逃れようとあらゆる努力を払ったため、彼女も手を放さずにはいられなくなりました。翌日は、この醜悪な行為を思い返して私は警戒し、あの鉄面皮な美女と二人だけになる機会を回避しました。しかし、彼女のほうはもっと思慮深く、酔いがさめるとまもなく私にこの家から出ていくよう忠告してきました。

23. 薄幸の小姓はいかにして商人の家を出て、どのようにして司厨長の力添えで彼の友人たちの世話になったのか。

二、三度、私はあのイギリス女の目の前を通りすぎましたが、彼女には一瞥だにしませんでした。そこまで彼女の醜悪さに恥ずかしい思いをし、また、彼女が姿をあらわしそうなところには一時でも足を止めまいと、心に決めていたのでした。それなのに私がフランス人の教区長に会いに行こうとした時、彼女は私の後をつける機会をみつけ、外套を引っ張って私をノルマンディーの人がやっている一軒の本屋に無理矢理に連れ込んだのです。そこのおかみさんは彼女の友人で英語をひどく流暢に話していました。この彼女の打ち明け話しの相手が私たちに通訳の役をしてくれ、私のことで彼女と夫の間に大混乱が生じたこと、その野蛮な夫が夫人の寝台の閨房の灯が明るくていったん目をさまし、朝になってから彼が酔っぱらっている間私たちが二人一緒にいたのをはっきりと思い出したこと、夫人はこの思い過ごしを取り除くため、また、二人がともにいたというのは夢を見ただけのことだと信じこませるために出来うる限りの努力をしたものの、夫からその疑いをとり去ることができなかったこと、その上、男の嫉妬心が余りにも強く小刀のひとつきで私を殺そう考えるまでに到っていることなどを、私に伝えます。ノルマンディー人の本屋のおかみさんは、さらに自分の意見だとして、気をつける必要があると言い、その男のような身分のイギリス人はひどくひねくれていて復讐心が強いから、最良の方策はもう家には足を踏みいれないことだ、と助言してくれました。この知らせは全くのところ気分の良いものではなく、皆が私に与えた忠告は受け入れるにはあまりにも腹立たしいものでした。あれほどまでに甘美な希望で私の心を満たしてくれた哲学者と別れてから二週間とたっていないのに、もし私たちの落ち合う場所から私が僅かでも離れれば、哲学者が約束通り私を迎えにきても、私の近況が伝わらなくなってしまう、と私には理解されたのでした。一方、仲買人の愚かしい嫉妬心がもとで何か醜聞でもおこったら、哲学者は私を連れていくのが嫌になってしまうのではないかとも危惧されました。これらのことすべてを考えいろいろ迷った末、私は一番確かな方法をとることとし、一家の主である商人のもとに人を遣わせて私からの挨拶を伝え、町に友人の何人かがやってきて三、四日つきあってくれるよう頼まれたと言ってもらいました。そして、その間、例の男が訪ねてきたらフランス人の教区長のところに、その旨伝えて欲しいとお願いしました。この方策は首尾上々のようにみえました。商人はきちんと伝言しよう

と約束してくれ、また、遣いの者にはあの大混乱を知っているようなふうは見せなかったというのです。それを聞いてある程度までは気持ちが和らぎ、私はもう地理学書や様々な旅行の本の読書のことしか考えなくなりました。あの博学の道案内が誓い通りに私を迎えにきた時、一緒に訪問しようと提案するつもりでいた土地の、気温や人々の人間性、慣習についての考察を繰り返すばかりでした。時折、私は読書に飽きると、あの高潔な司厨長と市外まで散歩にでかけて行きましたが、ほんの僅かな私の親切に対し深い感謝の念を示してくれたこの司厨長は、日毎に私への愛情がつのって行く様を私に示して見せてくれます。あそこの美しい芝生に座って話をしに行ける日は必ず心安らかな一日が過ごせたもので、芝は犁刃で返されたことはかつて一度もなく、人口が多いこの都の住人の憩いのために、遠い昔から大切にされていました。よく私は本で読んだ話をいくつか、気晴らしになるような物語を何編か、聞かせていました。それをしごく喜んでくれた、寛大で情け深いこの友は、私に好意を示し、この国の貴族に有利な奉公口を探してあげようと密かに私に申しででくれました。ある日、私が読書に夢中になっているところに彼が喜びいさんで姿を現し、しっかりと私を抱き締め、支度をしてついて来るように言います。私が少しでも幸せになれればと思いある地位を私にみつけた、と言うのです。私は大変感謝し、またその知らせを深く喜んで聞いているように取りつくろいました。しかし、哲学者と旅をし、彼から素晴らしい秘密を学ぼうという希望を抱いていた私には、ほかの喜びはどれも色あせて見えました。それでも、この友が私の気持ちを知らずに紹介してくれた貴族たちに会いにでかけるため、英国で仕立てた服を着て身を整えることにしました。

24. **どのようにして薄幸の小姓は、一人の貴婦人と知り合いになったか。**

その高潔な司厨長はある大貴族の家に私を連れて行きましたが、ここでは見るもの全てが豪華なものばかりで、召使いは誰もがビロードを着てい、また、従僕は金めっきをした銀板に各々の数字が打たれたものを胸につけていました。そのどれもが血色のよい顔をしていました。私はこの素晴らしい壮麗さを心の中では意にもかいせず、どんな裕福な英国貴族よりも立場は自分の方が上だという気持ちでいました。私の先導者は英国の習慣を身につけた友人とともに居て、私に一人の婦人に挨拶をさせました。そして、私のことを大変褒めそやすので、私は顔がまっ赤になってしまいました。私の精神の高貴さを非常に高く買って、また、私が忠実であることを請け合って、私の保証人となってくれます。私はうわべはうまく取りつくろっていましたが、そんな言葉はどれも気にいらず、哲学者が私に与えた約束を反故にする日がこない限り、雇ってもらう意図は決して持てませんでした。ところが、この家で私がなすことになる仕事をめぐって、皆が質問を始めたところ、それが私には大変名誉なもので、全く難しいことではないとわかりました。先程私が挨拶をした女性の娘さんである、若い御婦人の教育に仕えるというのがその仕事で、私の国の言葉を話し、聞き取ることができるようにしてさしあげるというものでした。それでも、この立派な仕事をお引き受けするのを、私の能力のいたらなさを理由に何とか丁重に辞退しようとした矢先、私の生徒[1]とされ

る人がこちらに来るのに気付きました。それは十三、四歳ほどの娘さんで、年の割には背の高い方でした。栗毛色の髪をし、デリケートな美しい肌の持ち主で、切れながの目は輝めいていました。特に口が美しく、唇は珊瑚よりももっと奇麗な赤い色をしていたと言っても過言ではありません。彼女がやって来たことで私はおおいに心が惑い、もし、この時私の胸に手でも置かれたら、心臓が高鳴っているのに気付かれてしまったことでしょう。それほど私は動揺していたのです。私は妙に取り乱したまま、彼女の衣装に接吻をしに進みでました。彼女が、私のような有能の家庭教師を持つことができて大変気を良くしていると、また、二日前から私に会いたくてしかたなかった、と言い切ってくれた時には、私もまったく茫然としてしまいました。私の魂は魅力に溢れる人の姿を、目や耳から受け入れるのに精一杯で、言葉への配慮まではとても行き届きませんでした。ただ、どもり、恥ずかしくなるくらい臆病な言い方で返事をしていたようです。このようにして近付きになった後すぐに、私の美しい生徒は、私たちのやりとりを見つめていた母親の方を振り返り、私をここでどのように取り扱ったらよいかと思われるかについて一言、二言述べました。その後、部屋にひきとるために母親に挨拶をし、私に後についてくるよう命じました。彼女と二人の侍女とともに私は彼女の贅沢な私室に入りました。上塗りの壁は見事な技術で仕上げられ、金と紺青で光り輝き、所々に、立派に描き上げられた目に心地よい絵画の小品がかけられていました。この部屋の四方をぐるりと巡る石の縁飾りのようなものの上には、海の中から引き上げられた、世にもまれで貴重な逸品が認められました。一方の側には真珠の光沢のある帆立貝が並べられていました。また、反対側には、見事な出来の印章模様のある陶器の花瓶が、黒檀材の台座つきの、金か金めっきの銀の小模様がほどこされた透明な磁器とともに飾られていて、そのどれもが、どこかの著名な彫刻家の傑作に数えられるものばかりでした。また、この美しの小部屋には大鏡が二枚取り付けられてい、全身が前からも後ろからも見られます。またあの美女が、四角いビロードのクッションを何枚も積み重ねあげて座っていた場所のそばには、銀と絹で縁を飾られた銀製の細長い棚板があり、立派な書物が沢山置かれていました。

この新しい女主人はくつろぎ、うちとけてくると、私に私の生まれ、地位の昇進、境遇などについて質問をし始めました。それらに対しては、当初からうまく隠そうと考えていたので、計画通りの答え方をしました。私の名はアリストンと言い、かなりの信用を得ていた商人の息子であるが、しばらく前にこの父を無くして母だけになったところ、商売に私が首をつっこむのを母がもはや望まなくなった、そこで、私は母にとっては役たたずの人間なので、世間を見に旅にでかけるのを許してくれるように母に頼んだ、こう私は彼女に言ったのです。そして、予定ではフランドルやオランダを訪ねるはずだったが、知り合いに出会ったところイギリスに立ち寄るというので、計画を変更してその人について来た、そして、ついに彼女のような立派な主人にめぐりあう幸運を得て、世界をさまよいたいという気持ちが突然失せてしまい、かくも名誉ある御奉仕に私の野望を絞ったのだ、と答えました。英国のこの美女は私の話のすべてに満足を覚えたと言い、お側の女性たちにも意見を求めましたが、その尋ねかたが余りにも私をひいきにしたものだったので、彼女たちは、私への

讃辞以外のことは何も申しのべることができませんでした。そうしている間に、小姓が一人扉を少し開けたので、中の者が英語でどうしたのかと尋ねると、小姓もそれに答え、今度は私の美しい生徒さんが手で私の腕に触れながら、『さあ、どなたかがあなたに御用ですよ』と、私に言いました。

25. 薄幸の小姓はどのようにして司厨長と別れたか。

小姓とともに階段の下まで降りていくと、私を呼んだのが親切な司厨長であったとわかりました。私は大変な恩義を彼に負っていましたが、この時あの人は、私が置かれることとなった立派な身分の者がとるべき振る舞いについて、二言、三言助言を与えた後、別れの挨拶をしようと思っていたのです。彼は、二日前に仕事が完了したが、私がこの家にすっかり落ち着くのを見届けるまではなかなか旅立つ決意ができないでいた、と私に告げました。我々は司厨長の家に行って一杯飲み、六本の櫂で走る小船の発着場まで彼を見送りました。そこからグレーヴゼンド[2]まではすぐだったのです。司厨長は、必要な時は何時でも役に立ちたいと道々語った誓いの言葉を船に乗る前にさらに繰り返し述べ、指にはめていたいくつものダイヤで小さな岩状に仕上げてあった指輪を、彼の思い出として取っておくように強います。そしてそのかわりに、私の指にあった金のリングを持って行きましたが、彼はこの交換を大喜びし、私のリングの価値を大変高いものにつりあげて考えます。涙を流さずに彼と別れることはできず、彼の姿が見えなくなるまでテームズ川の土手から立ち去ることができませんでした。卑しい身分の私にあれほど率直で高貴な心を見せてくれた、この新しい友の寛大さを褒め讃えながら、悲しい気持ちで私はそこから美しい生徒さんのいる館に帰ってきたのです。

26. 薄幸の小姓の初恋

新しいことはどのようなことでも、直ちに人から喜ばれるもので、あの日一日私は、自分の身の上におこった事件について考えてみる暇がまったく持てませんでした。娘さんから、その母親から、そして家の侍女たちから休みなく発せられる質問に、何時でも答える用意ができていなくてはならなかったからです。しかし、それだからと言って、待ち焦がれていたあの男のことを、その秘密の力で私を大変神聖に、大変裕福に、大変満たされた気持ちにしてくれるはずになっていたあの男のことを忘れてしまったわけではありませんでした。夜があけて家の門が開くやいなや、フランス人の教区長のところにあやまたずに出向き、着いたばかの時に泊めてもらった商人が、私を迎えにくることになっていたあの非凡なる男に関して何か知らせてきたかどうか、確かめたのでした。しかし、何も知ることはできず、ただ、そこの使用人の聡明でそつのない少年にお金をやって、そのうち私が待っているような外国人が商人の家にきたかどうか調べに行ってもらうこと位しか、できませんでした。一方、与えられた仕事をやり始めて三、四日もたたないうちに、美しい私の生徒さんは私の教え方に何か快いものを感じるようになりました。最初のうちは、言葉におかしな発音が出た時にそれを知らせるか、難しいと彼女の言う文章を説明するぐらいしかしませんでした。しかし、

私の顔に少し慣れ、私の話しを聞くのが楽しいと彼女が言うようになったので、私はちょっとした言い抜けをし彼女の関心を買って、短かいお話をしてさしあげ、また、小説に描かれた冒険譚を暗唱しました。こうした試みはみな、彼女の気に入って貰おうとする私の目論見に有利に働きました。彼女は同じ島国に住む恋人たちの身の上に起きた個人的な事件をいくつか知ってい、それらは私にとっては、まったく目新しい話でありました。しかし、彼女は神話についてはほとんど知らず、また、評価の高い英雄伝に関してはまったくと言ってよいほど知識がありませんでした。司教冠の金と真珠に比肩しうる巧みなできの作品[3]について考察をしたことはなく、優れたアリオストがその名の衰えるのをこれによって止めたあの精巧な物語[4]についても何も学んだことはありませんでした。さらに、タッソの崇高なる筆が、聖地に偉大なるゴッドフロワ[5]を導くことでその名声を不滅のものにしたあの栄光にあふれる仕事[6]についても何も知りません。私がそれらの楽しい分野のことについても少しは彼女に教えることができる、と申しでると、彼女は私の中になにか非常に貴重な鉱脈を発見したような気分になりました。間もなく物知りになることができるのだと得意に思ったのですが、知識の獲得にあたっては、私が読んでさしあげるものに注意を払うというやり方しかとれなかったため、かなりの努力が必要になりました。そのため、可能であればどんな時でも逃さずに読んでもらいたい、と彼女は私に申しでました。母親と私の間にいて仲介の労を数多くとってくれたこの抜け目のない娘は、母親が年を重ねた真面目な性格の人だったにもかかわらず、彼女に私から聞き知った軽い物語をいくつも話し聞かせていました。また、青金石や金メッキの銀で縁飾りのつけられた、大理石の絵などの小さな贈り物を私にたくさんしてくれたほか、勉強用の燭台や寝台の閨房にかける小さな銀板などの銀製品も贈ってくれました。

ある時などは私がダイヤをしているのに気づき、侍女たちに、私の指輪を見せてもらい指の太さを調べてくるようにこっそり命じて、それよりももっと高価なものを贈ろうとまでします。この贈り物を渡す時の彼女の巧妙さ、意図した恩恵を偶然のせいにするために彼女が見出した方法などには、まったく驚かされました。この美女は、そばに私しかいない時を見はからって手袋を片手からはずしながら、指輪を床に落としたのです。私がそれを拾いあげ、彼女に渡そうと思った時、彼女はその指輪が一番ふさわしい人の手にはない、彼女のためにそれを受け取っておいて欲しい、こう言うのです。絶世の美女から受けたこれらの寵愛のそれぞれは、私の魂に恋の炎を燃えあがらせる火つけ役になってしまいました。すでに私はこの気持ちのよい生徒に多くの魅力を感じてい、その時だったなら、あれほど素敵なことを私に約束してくれた哲学者がここに来るのをみても、彼女のもとを去る決意をするのはたやすくなかったことと思われます。繰り返しこの美しい娘について考えていたために、脳裏には彼女の姿が焼きつき、うるわしい彼女の姿が、絶え間なく私の頭を過るのでした。昼間彼女をみかけない時間にも、彼女が寝床にいる間じゅうもいつでも、その姿は私の目には見えていました。無邪気にも目から仰いでしまったこの毒は、間もなく私の心にその悪意のほどをみせつけたのです。知らず識らずのうちにこの病が私の理性を侵し、心の平安には必要ではないようなやり方で一層やさしくこの人を愛するようになっているのに、私は気がつきました。彼女

は私の目の覚めている時に姿をあらわすばかりではなく、夢のなかにまで出現したため、私は不安な気持ちなしに一時も過ごせないようになってしまいました。

27. 薄幸の小姓が女主人から受け取った初めての愛の証拠は何だったか。

私の麗しの生徒は、私が彼女を大切に敬っていることに気がつき、私の熱情を見ても怒りませんでした。彼女は、自分が私にとって役立つ存在なのだと判断し、私に密かな情熱があるからこそ一層念をこめて話をしものを教えるのだ、と考えたようです。それに、恭しく密かな愛を不快に思うのは、あらかじめ何か強力な嫌悪の情を相手に抱いてしまった女性くらいのものです。

彼女から高い評価を得たとはいえ、また、幸運に突き放されても勇気を失う私ではありませんでしたが、しかし真実の生まれを彼女に明かす機会をつかむまでは無謀であっても、我が情熱は、細かな配慮や奉仕によって彼女に示そうと決めたのです。ある日、彼女の従姉妹の一人である美しい娘さんが母親とともに訪ねて来たことがありました。私の生徒は従姉妹を歓待しようとしたものの、母親たちが非常に重要なことで話しあっていたため、おやつを作るように命じて彼女を私室に招き入れ、私を呼びよせて何か素敵な話しをしてくれるよう求めました。この命令に従い私は、彼女たちが退屈するような題材を選んではいけないと思い、プシケ(7)の冒険について話しをし始めました。それにこの時は、恋愛物語について詳しく話すのが嫌だという気分ではなかったのです。特に、愛の神アムール(8)の美を描写してさしあげましたが、私が詩の文体を用いたので彼女たちはこれを素晴らしいと思ってくれました。私は、キュピドン(9)の肉体を雪花石膏の像にたとえてこまやかに描写し、その姿態を寝床に横たわせてみたいと思わせるよう努め、髪の毛を金糸と見まごうかのように語りましたが、それだけでは満足できなくなりました。その上私は、人が普通注意しないところまで彼女たちに描いてみせたい、と思ってしまいました。キュピドンの目を、目蓋に覆われた目を、彼女たちに示したいと欲したのです。そして、それが二枚のバラの葉が被さったきらめく二粒のサファイアのようだ、と私は彼女たちに大胆にも言ってしまいました。その口は、完璧に整った形と釣り合いをあらわしていると言って描写し、さらに、色あざやかな真紅の唇は二列に並んだ真珠を隠し、海が生み出すどんな物より白く貴重なのだ、とも言ったのです。

続いて、愛の熱狂に達したプシケのしどけなさを描き、また、彼女が無分別にも性急になって、熱い油を一滴愛神の翼に落としてしまい、愛が愛神を傷めることになった様を語りました。

その後で、キュピドンの恐ろしい目覚めの話をし、私の気のむくままに非難の言葉をプシケにあびせかけましたが、二人の美しきお嬢様たちは、私とは別の考えかたをしているのに、それを認めるのでした。

しかし、不運な恋する女の嘆きを語り、彼女がこの神様に背くようなことをしたのは魔がさしたためであり、嫉妬に狂った姉妹のそそのかしにあったためでしかない、翼を焦がしたのも邪気のない一心な気持ちにつかれてのことなのだ、こう私が言いますと、話に耳をすましていた娘たちは、涙を流しだしました。私の主人は顔の前に羽の扇を広げ、目が濡れていることを隠そうとします。

従姉妹の方にはそれほど細やかな配慮がなく、目にハンカチをためらわずにあてて、無邪気にも、大変優美な言葉で苦悩がかきたてられ感動したと、打ち明けてくれました。私の若い熱狂的な話し方が効果を奏した後まもなく、二人の美しい娘たちが感動から覚めて、話の続きを聞こうとしたところ、親類の老女がやってきて暇乞いの挨拶をし、娘にも退散することが人を介して知らされました。そのため、私は神話を話し終えることができず、続きは二人の従姉妹たちが次に集まる時まで延期されました。

主人の親戚の娘さんが退出する際、私に特に心をこめて礼を述べるので、私は彼女の瞳を見ていて、もしこの家でやとってもらえなかったとしても別の女主人をみつけ損じることはなかっただろう、と考えました。私は彼女の言葉のひとつひとつに対し、謙虚さと感謝の念をこめてお答えしました。ところが、私の生徒さんはこの謎めいた場面にいあわせて、全く邪気のない挨拶を悪く解釈したのです。従姉妹がいなくなってしまうと、自室に戻り、プシケの冒険の続きが知りたいと言って私にもついてくるよう命じました。しかし、私が彼女のそばに行っても神話については何も言わず、それに関して触れるにしても、単に副次的なことばかりで、話しの本筋については何も述べません。彼女は十五分の間沈黙し、時折、冷たく怒った目付きで私を見つめるのです。が、口をあけた時は、親戚の娘さんの口から私が受けた讃辞への、ひどい非難の言葉を吐くばかりで、それらの讃辞は私としては全く予期もしていなかったものなのに、彼女のほうは私が熱心にそれを請うた、とするのです。

この高慢な心の持ち主は、彼女の親類の娘の心と美しさに私が魅了されてしまったのか、それとも親類が彼女への奉仕を放棄させるほどの人物だったのか、と私に尊大な態度で尋ねるのでした。またさらに、自分のもとを去りたいと言う人を力ずくでそばにとどめておくことは望まない、選択というものはどのような束縛も受けずになさなければならない、そう彼女はつけ加えて言うのです。

私はこの話しを聞くと胸がしめつれられるような気がし、真っ青になってしまったため、美しき主人はすぐに私の苦痛に気づき、そんな原因をつくってしまったことを後悔することにまでなりました。このことについては気分が少しもとに戻った時に、彼女の疑いが私を辱めるものであり、そんな考え方を彼女にさせるようなことは何もなかった、と答えておきました。そして、彼女が初めて私に命令を与えた時以来、私は自由を失ってしまっている、不幸にも彼女への奉公から身を退かなければならなくなっても、別の女性に仕えるというような卑怯なまねはしない、彼女だけに私をとりこにする力があり、彼女の寵愛と善意が、彼女のたぐいまれなる美しさとともに私にとっては絶ち切ることのできない鎖となっている、そう言ったのです。私たちの話し合いは二時間続きましたが、大変快いものだったため、一瞬のことのようにも思えました。嵐のあとに晴朗なる空が現れるような舞台、始まりは混乱と不安の材料が渾然としてい、中盤以降は危難や苦悩に満ちているが、必ず歓喜で終わるような舞台、そんな舞台で使用されそうな懇願の言葉の言い回しを、二人の会話は用いていました。私は罪のない被告人の役を演じ、彼女は偏見を持った裁判官や恨み深い告訴人の役割を演じたのでした。そして、私が長々と弁護をした結果、私たち二人は意見の一致をみることとなりました。

28. 薄幸の小姓はどのようにして主人の侍女に秘密を知られたか。

私たちの会話は誰からも邪魔されませんでしたが、しかし、侍女の一人にこのことを利用しようと思ったものがいました。鋭敏な精神の持ち主で、まもなく私たちの秘密を深く知ることになりましたが、私の利害に反したことは決して何もしませんでした。抜け目のないこの人物は私の主人のお気に入りでした。私たち二人が随分長い間話をしていたのを目撃した彼女は、私が部屋から出たところ階段のところまで会いに来て、まだ日の光で明るい開き窓のもとで私を間近から見つめ、面白半分に、こう言ったのです。

『すっかりお顔つきが変わってしまいましたね、どこかお悪いのですか。お目が潤んでまっかでいらっしゃいますよ。お泣きになったようですわね。さっきはありませんでしたのに涙の跡のようなものが頬に見えますわ。』

このように言われて私は全く驚いてしまいましたが、困惑しながらも、顔にあらわしてしまったことについて何か説明をしなくてはと考え、口実を探しました。しかし、娘は本当の理由を知っている、と断言します。そして、大変危険だから人には決して知られずに暮らすよう忠告したい、と言います。そして、彼女自身は口が堅いし二人に共通の主人に対して忠実だから、自分に対して恐れるべきことは何もないのだが、わずかでも私の無謀な情熱が外に漏れれば、それは暴かれて私の完全な命とりになるだろう、ことに、どうやら同じ女性を愛していると思われる待臣は、私が受けた優しい取扱いなど女主人から全く期待できない様子なので、羨望と敵愾心がかきたてられるに違いない、こう彼女は述べます。さらに詳しいことをたくさん語ってくれましたが、それをここに記すとあまりにも長いものになってしまいましょう。ただ、こう言っておけば十分だと思います、情熱的に恋をする若者の狂おしい思いを、この時私は存分に味わされたのだと。若者は心の病をその原因となった女性に打ち明けられなかった、しかし、その異常なほどの憂鬱や、義務のなせる業というより愛の証拠といえる熱意に強く燃えて彼が外にあらわした心遣いから、それをまわりの人のほとんどが見抜いてしまったのだと。

彼女の親切な助言を私が聞き、多くの愛情と誠実さに基づいていつまでもお互いに仕えあうことを誓った後、が、それだからと言って、生まれつつあった愛について彼女には重要なことは何も述べず、私は自室に退きました。しかし、これは彼女の忠告を反芻したり、その用心深さから何か得ようとしたためではありませんでした。主人の美しさのなかに感じられた魅力を、人に邪魔されずに胸に抱き、また、少し前に彼女が私の目や耳から注いだ甘美な毒を、心ゆくまで味わいたかったからなのです。彼女が私に対して持ったことを証拠立てた可愛らしい嫉妬心を、私は何度も何度も快く思いだし、様々な結論を引き出しましたが、どれもが自分に有利なものばかりでした。とりわけ、決して忘れることのできないある特別の好意を楽しく思い出しながら、生まれかけた希望をさらに膨らませていたのです。その思い出とは接吻のことで、おそらくは愛の歓喜からではなく憐れみの情から与えられたものでしょうが、理由はどうであれ、私を悦びでうっとりさせるにたるものなのでした。

歓喜であれ苦悩であれ、愛がひきおこす感情というものは奇妙なものです。これを感じることなく日々を送ったものは当然、愚かなまま死ぬものとされています。軽やかにいきいきと燃えるこの炎は、どれほど鈍感な魂をも目覚めさせ、いかに鈍重な感受性であろうと容易に繊細なものに変えるのです。魂がこの炎で燃えあがると、炎に似た活気をおびます。魂が愛の対象すべてに対し細やかな心遣いを示すようになると、人はどんなささやかな好意にも敏感になるし、またどんなにささいな侮辱にも、痛痒を感じないではいられなくなります。そして、両者の交わりあう場は、バラよりそのとげのほうが数多い場ではあれ、心地のよいところなのであります。ある場合には、好意的な一瞥、かすかな微笑み、甘い一言などが歓喜で人をうっとりさせますが、ある時には、相手のちょっとした拒否、尊大な目付き、わずかな冷淡さだけで人は嫌悪の情を催し、相手を殺しかねません。愛とは無軌道な暴君で、容赦なくおのれの偉大さを知らしめます。愛は与える時は並はずれの気前のよさを見せ、要求する時は、その臣下から自由や休息までも奪います。彼らからあらゆる善をうばいとり、苦悩が軽減するかもしれないという希望すら、残してはやらないのです。

29. 女主人を密かに慕うその家の待臣の怒りを薄幸の小姓がかきたててしまったのはどこまでありふれた機会においてだったか。

翌日、私は昼近くになって起きだし、庭に散歩に行って、それまでの生涯におこった事件を思い返していました。私の脳裏には、ものごとの移ろいやすさが一幅の素晴らしい絵となって広がっていました。私は、これから幸運に恵まれるはずの生まれたての子供の姿となって現れたり、運命が掃きだした藁くずのようだったりします。過ぎ去った昔の危難を思い出して身を震わせたり、これからの幸福を期待して溜め息をもらしたりし、まさか自分がおのれの情熱のとりこになっているとは考えてもみませんでした。失寵においても幸運においても私ほどは話題にのぼったことのない小姓がついにそこに姿を現して、深い夢想から私をひきだし、主人が呼んでいると私に知らせました。瞬時の間もおかずに私はこの命令に従いました。あの方は御自身の私室にいて私がそれまで目にしたよりはるかに美しく、きわめて念入りに身を整えていました。すそが銀でふちどられたバラ色のサテンの部屋着を身に纏い、アウロラ女神[10] のいきうつしかと思えたほどです。美しい髪は、まるで三美神[11] の手で整えられたかと見誤るほどみごとにカールされていました。お顔はあまりにも色が白く輝いてみえるため、たいそう貴重な滑石油でも塗ったのかと思われます。また、悩ましいことに、両の目には誰がともしたか知れない新たなきらめきが認められ、私は正視し続けられませんでした。近づくと彼女は私の腕をとり、椅子に再び腰をかけ、夜をどう過ごしたか、彼女に仕えてどう感じているか、と尋ねます。私はほとんど休めなかったことを隠しませんでしたが、私の彼女への奉公については、これは世の中でもっとも快い鉄鎖であり、その鎖に進んで繋がれたいと思わせた栄冠は今までこの世には全くなかった、と彼女に言明しました。詩情豊かにこのような讃辞を彼女に述べたのち、できうる限り巧妙に彼女への熱愛の情を示す言葉をつけ加えましたが、この時私のむこうみずな情熱が人に知れてはいけないと思い、できうる限り慎重を期しました。私た

ちの甘い会話は、母親からの伝言を伝える家の侍女たちの出入りで三、四度妨げられましたが、夕食に彼女が呼ばれるまで終わることを知りませんでした。諸事のしきたりに従い、侍女がいる間は私が話しをしたりそれを聞いてもらったりすることは中断されたのですが、そのしきたりの実施の方法が次には私に好都合に働き、私はさらに彼女を見つめ、仕え続ける栄誉をものにしました。突然、あの方は食卓の世話係の貴族に二、三の用事を与え、彼のかわりに私がお側で仕えるよう命じたのです。私の用心しなければならない待臣はこうして再三にわたって職務を中断され、その代理として私は彼の仕事をするよう選ばれたのでした。しかし、愛に狂ったこの男は私がかわりに彼の職務を遂行するのを見て絶望し、私に高く支払わせようと思いたちました。この男は席をはずした間、私がわれわれの主人に飲み物を差し上げたことにひどい嫉妬心をかきたてられ、それ以来私に毒いりの肉を食べさせようという企てをたてたのです。

30. 薄幸の小姓の主人が再び表にあらわした嫉妬心と、主人にすがって泣きながら考えついた愛を疑われないためのある工夫について。

二日とたたないうちに、主人の従姉妹は挨拶の言葉を主人に送ってきました。とくに、彼女の母親の加減がよくないと告げ、主人が彼女の家を尋ねる時には私も連れて行き、神話の続きを聞かせてもらえないか、と懇願しました。従姉妹が遣いによこした小姓はフランス人でしたが、主人は手紙を読み終えた時この小姓が私に耳もとで話しをしているのに気づき、不安に陥りました。小姓が私に言っていたことはとるに足らないことで、ただ、私にイギリスに来てどの位になるかとか、彼が五、六年前から慣れ親しんでいるイギリス人の風俗・習慣に関して知っていることのうち、役にたちそうなことを話しに暇な時に会いにきてもよいかどうか、などについて尋ねていただけなのです。しかし、うら若きこの美女は、最初のうちは好意的な目で私を見ていましたが、とるにたらない内緒話を悪い方にとるようになりました。従姉妹が私のことを愛情こめて称賛していたように思えたことに嫉妬を感じていた主人は、従姉妹が私を買収し、今の奉公をやめさせるために小姓を遣わせたのではないか、と邪推したのです。受けた伝言のためか、あるいは小姓の話に私が耳を貸しているのを見たためかはわかりませんでしたが、主人がまったく度を失い、不安に陥っているのに私は気づきました。彼女はしばらくの間私に目を見据えていましたが、私にそれが気づかれたとわかるやいなや小姓についてくるように合図して、母親の部屋へ急いで立ち去りました。私は主人の不機嫌な姿を見てしばらく狼狽しましたが、その理由については推測がつきませんでした。ようやく、小姓をともなって彼女が戻ってくるのを私は認めましたが、ちょうどその時、彼女は従姉妹に伝えて欲しいことをすべて小姓に対し英語で言い終わったところでした。ところが、少年は私の不運と手を結んで私と主人の二人を仲違いさせようとするかのように、長い間階段の扉のところにとどまり、まだ何か話したりないことがある様子で時おり私に目で合図をするのです。私の主人は小姓の顔の動きの一つ一つを念入りに観察し、そこからいくつかの結論を引き出しましたが、それらに彼女は苛立って私に言いがかりをつけてきたため、私はひどく動揺することになりました。軽率

な同国人が退出すると、私の熱愛する美しくいとしい人はしばらく物思いにふけっていましたが、そのうち部屋の窓際に私を呼び寄せ、苦々しく微笑みながら、何かひどく不快なことで侮辱を受けたような様子をし、こう言ったのです。

『ねえ、先生、さぞかしお喜びのことでしょうね。そんな風に生徒を右から左へ取り換えてもあなたはほとんど後悔なんかなさらないのでしょう。従姉妹は私と同じことをやってもらいたい為に、母にあなたを欲しいと頼んでそれであなたを喜ばせている、そうに間違いないでしょう。本当に、彼女はとてもきれいな娘ですわ。あなたにも彼女の心ばえはとても快いものに見えたのでしょう。だけど、あなたのことが好きだという点では私のほうが上ですわ。』

こう言うと、彼女の目は涙でうるみました。くやしさと苦痛が顔に浮かぶので、何も悟られまいと思い、その場を逃げ去ろうとしましたが、私は彼女のドレスをつかんで引きとめ、ひざまずき答えました。

『何ということを私に、おっしゃいますか。いったい私がこの家を出て別の主人に仕えなおすなどということがあるとでもお思いなのですか。お嬢様、あなたの美点の素晴らしさや私の心優しい愛情についてそこまでご判断をお誤りになりますか。そして私を以後縛ろうとする鎖がダイヤモンドでできているわけではなく、それもある褒章の確かな保証として私にかけられようというのに、私がその鎖に今の鎖を変えたいとお思いになったのですか。変えるくらいなら死んだほうがましですし、お嬢さまに捨てられれば墓が私を迎え入れるだけなのだということを、お忘れくださいますな。』

こう言い終わると嗚咽がこみあげて余りにも激しく胸を締めつけ、目には涙があふれ続けたので、美しいお嬢様は私のことを大変お哀れみになりました。私を助け起こして、長い間お手に接吻をさせてくださいましたが、そこに私の涙はひっきりなしに流れ落ちていました。非常に優しいお言葉をいただきましたことで私の苦悩も和らぎ、大変甘美な思いがしてきたため、その苦悩さえ祝福してもいいと感じられました。その時家の奥方様がたまたまお部屋からお出ましになり、私たちのところに来ましたため、もう少しのところで私たちは不意を襲われ、私が流していた涙を目撃されるところでした。しかし、私は物音をわずかに聞くやいなや、目が涙で腫れあがり真っ赤になっていたことに対しうまい言い訳をするために、かなり愉快なことを考えつきました。ハンカチを目の上にあて、笑い過ぎて涙を流している風を装ったのです。またその思いつきを余りにも自然に実行したので、心優しい夫人はだまされてしまいました。最初、奥様は何がおかしくてそれほど笑うのか私に聞きましたが、私はそれには何も答えずタピスリーに体を押し付け、笑いたいという途方もない欲望をこらえているかのように振る舞いながら、さらに長い間笑い続けました。私は、ある極めて滑稽な光景を目にして笑いがとまらなくなってしまった我が身の弱さを彼女に詫びました。母君はいったいそれがどんなものだったのか私に尋ねましたが、喋りだしたらまた私の笑いがさらに激しくなるに違いないと考え、すぐにどのような折に見たのか娘の方に問いかけました。その時になってようやく、猿のような顔をした体の前と後ろにこぶのあるかなりの小男が、珍妙な服装で窓

の前を通りかかった時に馬がつまずいたため、馬の首からどすんと落ちてしまい、その拍子に着ていた外套が頭に覆い被さり、半ズボンの紐も切れてお尻が丸見えになってしまった、こう私は彼女に話したのです。そして、我慢できずにこんなにもひどく笑ってしまって大変恥ずかしく思っているが、小男が余りにもおかしかったので笑いやめることができず、死んでしまいそうだった、と付け加えて申しました。老夫人は話を聞いて多少は笑いましたが、私の無遠慮な行為を若さのせいとしました。しかし、娘のほうは私の思いつきを素晴らしいと褒め、この策略を講じたことを私に感謝していました。

こうしてこの一件にかたはつきましたが、しかし再び、私にとっては余り愉快ではない別の問題が持ち上がりました。重要な用事ができて心優しい母君が一日中外に出られなくなったため、彼女は姉妹のところに私を出向かせて挨拶の言葉を伝えてもらおう、と考えたのです。誰か他の人間にその遣いをさせようと私の生徒さんが母君に話しかけましたが、母君は頑として受けつけませんでした。従って、意に反してではありましたが、また新しいもめごとの種になると思いながらその伝言を伝えるために出掛けて行ったのです。

31. 薄幸の小姓の主人の嫉妬心の再燃と、それが彼女の愛をどれだけ進行させたかについて。

誰か別の人を愛しているのではないかと主人から疑われたのは迷惑な話でしたが、しかし、従姉妹が私に気があるのではないかと彼女が考えたことに関してはほとんど間違いはありませんでした。それは私が主人の従姉妹にしてさしあげるようにあちらで言いつけられたことから察することができました。家のものたちがみな私を手厚くもてなしてくれるのには驚かされましたが、それは、彼らがそのことで主人にこびようとしていたからにほかありませんでした。フランス人の小姓は私を中庭で見かけるやいなや、それを彼の若い女主人に知らせに走り、やがて二人の女性を伴って私の目の前に戻って来ました。母上の私室に通していただきたいと最初に頼んだのにもかかわらず私はその娘の住居のほうにまっすぐ連れて行かれ、そこで娘から大喜びで歓迎されて何度も礼儀正しく抱擁をされました。それらのもてなしのどれに対しても私は氷塊のように冷やかに対処し、長くそこにとどまらずに戻るよう命じられている、家で私に用があると言われているなどと申し述べて、暇乞いをすることばかりを執拗に繰り返していました。しかし、それは言葉だけで空しく終わり、そのたびに私は力づくで引き止められます。砂糖漬けが持ってこられ、それを食べるよう私は勧められました。私が苛立ちを表しても曲解されてしまうのです。美しい従姉妹は私が主人に不快を催させることを心底おそれているととらえ、私の奉公には何か厳しいものがあるのだと考えました。あちらがもっと優しく取り扱ってくれればいいのになどと彼女は言って、その件については大変親切なことを数限りなく語りながら、決してありふれてはいない愛の証しを巧みにそこにさしはさむのでした。向こうにいた二時間というものはそんな会話を切り捨てるのに精一杯でしたが、主人の方は自分が不快にならない範囲で、私があちらの家にいてもよい時間というものを計算できたため、私は彼女に対し償いをさせられることになりました。病人を見舞い、そのお礼の言葉を賜ってから

私は家に戻り、主人に会って辛くて骨の折れた仕事の報告をもれなく正確に、つつみ隠さずにいたしました。しかし、そんな説明だけでは満足が得られません。そこねた機嫌をなおしてもらうためには従姉妹の家には二度と行かない、翌日の訪問に私がお供をするという約束が従姉妹と彼女の間でできていたが、私は仮病をつかってその役を免除してもらう、こう誓うことになってしまいました。そして、真実らしくみせるため、翌朝私は血を抜いてもらい、寝室から一歩も外にでないという取り決めが交わされました。

ことは決められた通りに運びました。私は瀉血を施され、かなり遅くまで寝床にいました。母君とともに伯母上の家にでかけた私の主人は、私がお供できなかったことの失礼を従姉妹に詫びたところ、従姉妹は私の病気を知って悲しみの意をあらわし、すぐにその気持ちを私に伝えてきました。彼女は来客が自宅を出るとすぐに私のところにフランス人の小姓を遣わせ、礼儀正しい挨拶を私に送り、瀉血をした腕にまくようにと大変きれいなスカーフを届けてきました。挨拶に対しては、私はそれを受け入れ、優雅に振る舞って受け答えに応じましたが、スカーフは受け取ることを固辞し、自分がそんなに立派な贈り物に値いしないことをよくわきまえていると言って謝り、極めて高価でまばゆいばかりなのでとても身につけることはできない、と申しそえました。しかし、小姓は私の辞退を単なる儀礼としかとらえず、どれほど礼を欠かさずに注意しながら抵抗してみても、スカーフを広げて私の首のまわりに巻きつけてしまうのでした。そうこうするうちに、私たちがいた中庭に四輪馬車が入って来、乗っていた私の主人は扉のそばにいたため、従姉妹の小姓の姿と彼が私に与えようとしていたスカーフをはっきりと認めてしまいました。私が主人に気付いたときどうなってしまったか貴方に申しあげましょう、まったくのっぴきならない状態に陥ったのです。もし人が苦痛と恥辱心から死ぬことができるのなら、私はその場でただちに死んでいたと、貴方に断言することができます。

すぐに私は、主人が降りる側に進み寄り、手を差し出しましたが、彼女は私に助けられるのを好みませんでした。部屋について行って事情を説明しようと思いましたが、彼女は扉を閉めるように命じたため、それで私は決定的に罰せられ、ひどい責め苦を与えられることになったのです。しかし、情け知らずのあの美女の怒りをなだめることに対しては、私は全く希望を捨てずにい、困惑しつつも「手を引けば勝負は負け」というかなり当を得た諺を頼りにして、夕食後からずっと夜まで主人の部屋の扉のところにい続ける決意をしたのでした。主人のお気に入りのお付きの女性がしばらくしてから出て来ましたが、階段のところに石像のように身動きせずにいる私の姿を見て、通りすがりに私にそんなに身を苛んではいけない、二人であのかなり気難しい人の気持ちを操らなければならない、そのためには策を練り、忍耐強く待たなければならない、と話しかけて来ます。彼女は戻ってきて私には閉ざされた神殿のなかに再び入ろうとした時、もう一度、うまくとりなし私を助けてあげようと、約束してくれました。おおよそ一時間半ほどたったでしょうか、私に助言と援助をかくも献身的に与えてくれたこの守り神は、主人の住居のほうに私を通そうとして扉を半開きにし、それから突然外に出てきて、私に部屋に入るよう合図しました。中には主人が一人でいた

ため、再び彼女の愛情を得ようと努力するためのまたとない機会に恵まれることになったのです。最初は彼女の手厳しさを身をもって体験しましたが、私が抗議しさめざめと泣いたために、彼女の気持ちの荒だちは最後には和らぎました。私は許しを請うために彼女の足下に身を投げ出しましたが、それを手ではねのけて私に最初に言った彼女の言葉は、このようなものでした。

『何ですか、ひどい方ね、あんな裏切りをしておいてよくもまた私の目の前に姿を現すことができるわね。なさったことを厚かましくも否定して、不誠実をさらに重ねようというのですか。もっとはっきりとお認めになるべきですわ。それとも、あの場を見た私の目をとがめて、真実を幻想だったと言いくるめようとなさるのですか。従姉妹に鉄鎖で結ばれた公然の奴隷に、あなたはなったのではないのですか。さっき送られてきたスカーフはいったいどうしたのです。あの愛の証しはあなたに恥ずかしい思いをさせるものではなかったはずよ、だってあなたはあれを喜んで身につけて私のことをうちのめしたのですもの。』

私は彼女の激烈な感情が過ぎるにまかせていましたが、このような非難が彼女の口をついてでるやいなや言われたようなことは何もしていない、と声高に主張し、彼女の従姉妹とのおつきあいの際も決して彼女を裏切ったことはない、要するにあの小姓がまたやって来ただけなのだ、と繰り返し何度も彼女に誓いました。彼女のなかで疑惑は非常に強くなっていましたが、そのために私が苦しんでいるのを見て、ついに彼女も疑いを捨てました。彼女が私に抱いていた好意はこの件で減るどころか、かえって増したほどです。愛が不当に辱められたことで私はすっかり仮面をぬぎ、美しい主人にそれまで私が自分の生まれについて隠していたことを打ち明けました。その時、私が貴族の生まれで、どれだけの栄誉を受けつつ育てられたかについて彼女は知ることとなったのです。若さというものは大胆で気違いじみたものです、その上私は、しばしば持ちたいと思っただけに過ぎない財産をしっかり所持しているものとしてしまって、三ヵ月たたないうちに英国の大貴族にひけをとらないほどの装備と輝きを整えて御両親に結婚を申し込みに戻ってくると、彼女に断言までしてしまいました。まったく私は単純で、あの後再会してもいない錬金術師の約束をあてにしてそれらの盛運のすべてを彼女に約束してしまったのです。当然、主人は私の価値を認め将来には財産が手にはいるのだと信じてしまい、私が述べたことをそのまま自分の心に刻みこんでしまったため、以後は私をただ単に感じのよい下男とは見なさず、まもなく彼女と結婚をすることになる今は身を偽った貴族だと考えるようになり、何のためらいも感じずに私への愛に身をまかすようになりました。こう打ち明けて以来、私たちはまたいくつも秘密の愉快な話しをしましたが、ところがそれが私の身をあやうく破滅させるところとなってしまいました。根も葉もない希望が私たちの中で膨らんできたため、彼女は余りにもあからさまな愛を思わず表にあらわしたのです。　（次号に続く）

（註）

1） ミロール、Milor 一族の娘。（ ジャン= バティストの注による）

2） テームズ河の河口に位置。

3） 古代ギリシアの小説家 Héliodore の書いた恋愛小説『テアゲネスとカリクレイア』（『エチオピア物語』の別称で知られている）のこと。タッソやセルバンテスの手本となっている。また、ラシーヌやボワローの愛読書だった。

4） 『狂えるオルランド』（1532年に四十六歌として完成）をさす。十六世紀イタリアの最高傑作。トリスタンはアリオスト Arioste（1474-153）3からも影響を強く受けた。例えば『書簡集』（1642）では、アリオストからも主題を借りている（c.f. Lettres Héroïques LX）

5） Godefroy タッソの『解放されたイェルサレム』の主人公で実在の人物（1061-1100）。第一回十字軍でキリスト教徒を勝利に導いた。

6）『解放されたイェルサレム』（1575）のこと。タッソ Tasse（1544-1595）はアリオストと並ぶイタリアの大詩人でトリスタンに影響を与えている。

6） Psyché 二世紀のローマの作家アープレイウスの作品『黄金とロバ』の主人公。王の娘で絶世の美女だった。神託により怪物の人身御供にされたが、怪物と幸せな結婚生活を送ることとなった。しかし、姿を見せない夫を一目見ようとして夜、燈火で照らすとそれはアフロディートの息子で美青年のエロス・アモル(=アムール）だった。びっくりして熱い燈油を彼の上にたらしてしまったため、夫は逃げ出した。彼女はそれを追って世界をさまようが、アフロディートの怒りを買い様々な難題を出される。地獄の女王ペルセポネーから美の箱を持ってくるという最後の試練に挑んだ時、禁じられていたのに好奇心に負けて箱を開けてしまったため、深い眠りに陥らされる。彼女を忘れられなかったアモルが彼女を眠りから覚まし、ゼウスの許可を得てから、アフロディートと彼女を和解させた。

8） Amour ギリシアの愛の神。註の 6）を参照。

9） Cupidon ローマのアモルにあたる。註 6)を参照。

10） Aurore 曙の女神。

11） Graces、すなわち Aglaé、Thalie、Euphrosyne の三女神のこと。

会　員（アイウエオ順）

伊藤　洋	岩瀬　孝	大越敏男	川枡弘子	小林　卓	神保　剛
鈴木美穂	関根敏子	関谷苑子	千石玲子	竹田　宏	戸口民也
野池恵子	橋本　能	浜野トキ	丸山弓子	皆吉郷平	

後　記

まず、去年に引き続き「エイコス」第V号を出すことができたことは喜びにたえません。また、戸口民也氏が春に長崎からわざわざ出向いて研究発表をして下さった上に、論文を寄せてくださいました。これは、ここ数年長崎外語短大の紀要に連載されている「ヴァルラン・ル・コントあるいは新しい演劇のために—17世紀フランス演劇史序説」の基になっている資料の一部を紹介し、再読解を試みたものです。さらに、2号まで健筆をふるわれていた小林卓氏が論文を寄せてくださいました。いずれも久し振りの参加で嬉しい限りです。ただし、残念ながら「論文梗概集」は今回はおやすみさせていただきます。次回は必ず掲載いたします。悪しからずご了承ください。

エイコス　V

発行日　1989年7月1日
発行者　17世紀仏演劇研究会
〒162　東京都新宿区西早稲田早稲田大学
教育学部　伊藤　洋　C／O
TEL 03-203-4141
印刷　㈲　七　月　堂
〒154　東京都世田谷区梅丘 1-24-2
TEL 03-426-5972